

菊鹿町文化財調査報告 第8集

熊本県の主要城跡

2001年

か もと ぐん さく か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

熊本県教育委員会

菊鹿町文化財調査報告 第8集

熊本県の主要城跡

2001年

か も と ぐ ん き ゅ う か ま ち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会
熊本県教育委員会

ご 挨拶



菊鹿町では、平成7年度に『菊鹿町史』を編纂しましたが、その後も継続して補遺編を刊行してきました。町内所在の中世城跡調査も、その流れに沿うもので、町史の執筆員であった県文化課の大田幸博先生に、引き続いて調査の指導をお願いしています。城跡関係の調査報告書も6冊を数えるまでになり、貴重な資料を得ました。

このような状況の中で、先程、大田先生と話し合いの場を持つ機会がありました。先生からは「県では、昭和50年度から3ヶ年計画で中世城跡の悉皆調査を実施して報告書を作成した。私は、その時の担当者であった。全国に先駆けての画期的な試みであったが、それから四半世紀も経過して中世城跡の研究も飛躍的に進歩した。近年、特に破城の痕跡を残す城跡が県内各地で発見され、大きな話題となっている。ついては、最近、文化庁記念物課へ向かい、田中城跡の国指定問題を話し合ったが、その際、現時点でのデータをまとめた新しい報告書の必要なことを痛感した。しかし、何分、県に予算がないので、歯痒い思いをしている」との相談がありました。

そこで、私の方からは「形として、多少、変則的なものになるが、取敢えず、菊鹿町の中世城跡調査の報告書の中で取りまとめたらどうですか」と勧めた次第です。「後日、その報告書を、県教委で検討されて位置づけをなされますと、県が発刊した報告書と同格のものとなります」大田先生も意を強くされ、お礼の言葉がありました。

今、この「ご挨拶文」を記すにあたり、教育委員会から提出されたゲラ本を一読したところですが、菊鹿町関係では、隈部氏が治めた「隈部館跡」と「米の山城跡」の掲載があり、非常に興味深いものがありました。中でも、これまで「県内でトップクラスの県指定の城館跡」と言われてきた隈部館の位置づけが、明確になされた様で嬉しく思います。さらに、私が関心を持ちましたのは「県内94市町村の中で、城跡を有しないのは、わずかに、1町3村」という調査結果でした。中世では「一村一城」の状態で城が分布していたことになります。今日では、差し詰め役場が城ということでしょう。中世に生きた人にとって城は、極めて身近な場所であったことがわかります。

この報告書の刊行が、県内中世城跡の見直しの契機となれば、幸いに存じます。最後になりましたが、大田先生をはじめとして、関係各位の努力に敬意を表したいと思います。

平成13年3月31日

菊鹿町長 隈 部 弘 正

序 文

最近、県内では、各地で城跡の調査と整備が行われています。それだけ城跡は、地域住民にも親しまれている遺跡ということになります。菊鹿町も12城跡を数えますが、隈部氏の栄華を伝える隈部館跡は、昭和49年の発掘調査の後、整備されて、町民の憩いの場となっています。上永野地区の山中にありますが、何度、訪れても感銘を覚えます。庭園跡は、立石と泉水跡が程良い調和を保ち、原形に近い状態にあると考えられています。泉水の縁に配された扁平な大石は踏石で、かつては、城主の隈部親永も、ここに佇んで瞑想にふけたのでしょうか。地域住民は、この館跡を親しみを込めて「隈部さん」と呼んでいます。

今回、隈部町長や大田先生と相談の上『熊本県の主要城跡』の報告書を町教委から刊行することになりました。熊本県が、城跡の悉皆調査を実施したのは、昭和50年代の初期ですから、もう四半世紀が過ぎたことになります。それ以来、城跡の実態を取りまとめた報告書はありませんので、いい機会だと思っています。町長も『ご挨拶』の中で述べていますが、後日、この報告書を県教委で位置付けしていただければ、幸いに存じます。収録された城跡の中には、破城を伴う新発見の城跡も含まれています。最新の情報を集めたものとなっています。貴重な資料になるものと思われまふ。隈部館が相対的に位置付けられたのも、嬉しく思います。

最後になりましたが、この報告書を作成するにあたり、資料を提供して頂いた市町村の教育委員会や、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成13年3月31日

菊鹿町教育長 中原 哲 哉

目 次

はじめに	1
1. 調査が実施されている城跡	5
〔1〕 古代山城 鞠智城跡	5
〔2〕 中世城	
① 田中城跡	7
② 粟部館跡	10
③ 米の山城跡	13
④ 堅志田城跡	16
⑤ 永里城跡	19
⑥ 河内浦城跡	21
⑦ 萩原城跡	24
⑧ 藍根城跡	26
⑨ 三川城跡	28
⑩ 宇土城跡	30
⑪ 伊倉城跡	30
〔3〕 中近世城	
① 麦島城跡	31
② 鷹ノ原城跡	34
③ 佐敷城跡	37
〔4〕 近世城	
① 熊本城跡	39
② 人吉城跡	39
③ 富岡城跡	40
2. その他の主要な中世城跡	43
① 筒ヶ嶺城跡	43
② 内牧城跡	43
③ 二辺原城跡	43
④ 南郷城跡	44
⑤ 高森城跡	45
⑥ 城林城跡	45
⑦ 菊池城跡	45
⑧ 城村城跡	45
⑨ 竹迫城跡	46
⑩ 須星城跡	46
⑪ 岩野道祖城跡	46
⑫ 古城跡 (隈本城跡)	47
⑬ 河尻城跡	47
⑭ 豊福城跡	47
⑮ 化山城跡	47
⑯ 陣内館跡	48
⑰ 愛蔵寺城跡	48
⑱ 矢崎城跡	49
⑲ 八代古麓城跡	49
⑳ 野角城跡	49
㉑ 天草城跡	49
㉒ 岩城跡	50
㉓ 鍋城跡	50
3. 94市町村の城跡分布状況	51
4. ま と め	52

目 次

第1図	熊本県の主要城跡位置図	第42図	麦島城跡出土瓦
第2図	鞠智城跡位置図	第43図	H11・12年度麦島城跡遺構配置図
第3図	鞠智城跡全体図	第44図	1号石組遺構実測図
第4図	復元された米倉	第45図	主郭東側石垣跡立面図
第5図	復元された兵舎	第46図	蔵ノ原城跡位置図
第6図	田中城跡位置図	第47図	蔵ノ原城跡周辺地形図
第7図	田中城跡全体図	第48図	九州諸城図（南ノ関ノ城）
第8図	主郭西側空堀・断面実測図	第49図	I郭西側石垣線推定図
第9図	辺春・和仁土寄陣取図	第50図	I郭北西端部隅枘台石垣平面図
第10図	隈部館跡位置図	第51図	I郭西端部斜面石垣平面図
第11図	隈部館跡周辺地形図	第52図	棟飾り瓦（鬼瓦）
第12図	隈部館・庭園跡実測図	第53図	佐敷城跡位置図
第13図	隈部館跡全体測量図	第54図	佐敷城石垣の時代区分
第14図	米の山城跡位置図	第55図	慶長国絵図にみる城郭（佐敷城）
第15図	米の山城跡周辺地形図	第56図	本丸東側門跡実測図
第16図	石列B上面実測図	第57図	熊本城跡位置図
第17図	石列B側面実測図	第58図	人吉城跡位置図
第18図	堅志田城跡位置図	第59図	富岡城跡位置図
第19図	堅志田城跡周辺地形図	第60図	宮岡城跡全体測量図
第20図	II郭測量図	第61図	二の丸西側4面の欠損幅
第21図	薬医門復元図	第62図	二の丸西側6・8面の欠損幅
第22図	堅志田城跡II郭出土遺物（一例）	第63図	筒ヶ嶽城跡位置図
第23図	永里城跡位置図	第64図	内牧城跡・二辺塚城跡位置図
第24図	永里城跡周辺地形図	第65図	南郷城跡位置図
第25図	河内浦城跡位置図	第66図	高森城跡位置図
第26図	河内浦地区（旧一町田村）周辺地形図	第67図	城林城跡・菊池城跡位置図
第27図	出土瓦の比較	第68図	城村城跡位置図
第28図	河内浦城跡全体測量図	第69図	竹迫城跡位置図
第29図	萩原城・伝世和鏡	第70図	須屋城跡位置図
第30図	萩原城跡位置図	第71図	岩野道祖城跡位置図
第31図	萩原城跡全体測量図	第72図	古城跡位置図
第32図	葛嶽城跡位置図	第73図	河尻城跡位置図
第33図	葛嶽城跡周辺地形図	第74図	豊福城跡・花山城跡位置図
第34図	葛嶽城跡出土遺物（一例）	第75図	陣内館跡位置図
第35図	三川城跡位置図	第76図	愛蔵寺城跡位置図
第36図	三川城跡周辺地形図	第77図	矢崎城跡位置図
第37図	三川城跡出土遺物（一例）	第78図	八代古麓城跡位置図
第38図	宇土城跡位置図	第79図	野角城跡位置図
第39図	伊倉城跡位置図	第80図	天草城跡位置図
第40図	麦島城跡位置図	第81図	岩城跡位置図
第41図	麦島城跡想定図	第82図	鍋城跡位置図

例 言

1. 本書は、熊本県の主要な城跡をまとめた報告書である。
2. 報告書の作成は、菊鹿町が実施している「町内城跡調査」の一環として実施した。
3. 報告書の執筆は、大田幸博氏が行った。
4. 当該の城跡の所在地である市町村教育委員会からは、図面提供などの協力を得た。
5. 図面の整理と編集業務は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが行った。
6. 本書の編集は、富田弘海（菊鹿町教育委員会 社会教育課係長）と大田氏が行った。

はじめに

熊本県では、昭和47年度に文化課が設置された。中世城跡調査の本格的な取り組みは、それ以降である。

①昭和47年度に、天草の牛深市で久玉城跡問題が発生した。国道266号の改良工事によるもので「久玉城跡消滅か」という新聞報道が契機となった。県教委では、同年8月と9月に発掘調査を実施し、中世城でありながら近世城と同じ様な石垣を有する城跡であることを確認した。そこで、県教委が発掘調査を行い、県土木部、建設省との協議により、道路は迂回し、城跡は現状のまま保存されることになった。久玉城跡は、昭和49年3月に県の中世城跡として第1号の県指定史跡となった（ただし、石垣は天端石まで現存しており、近年、県内各地で発見された破城の石垣とは全く異なる。何故、「一国一城令」の適用を免れた状態にあるのか、大きな疑問である）。

②昭和48年12月、宇土市議会で、名和氏の本城と伝えられる神馬町の西岡台に中学校を移転する計画が決議された。城跡地は、櫓を伏せた様な広い丘陵地で二つの頂があり、東側の高台が「千段敷」、西側の高まりが「三の城」と呼ばれていた。市教委では市指定史跡でもあったために、昭和49年3月から昭和51年3月まで発掘調査を実施した。結果として重要な遺構が相次いで発見されたために、県教委と文化庁と協議の上、校舎移転を断念した。城跡は、保存されることになり、昭和54年3月に「宇土城跡」として国指定史跡となった。昭和56年度から、文化庁の国庫補助事業として調査と整備が続けられている（隣接地には小西氏の宇土城跡があり、混乱を招き易い結果となった。城名として、検討の余地がある）。

③県立矢部高校の校舎改築に伴い県教委は、昭和49年11月から昭和51年2月まで「浜の館」を発掘調査した。阿蘇大宮司の館跡と伝えられる所で、建物跡や庭園跡が検出され、土域からは、唐三彩の陶磁器などが出土した。これらの遺物は、阿蘇家の宝物と見られ、21点については、昭和61年6月に国指定重要文化財となった（浜の館は、近隣の岩尾城跡とセット関係にある）。

④久玉城跡・宇土城跡・浜の館の調査が契機となり、県教委では、昭和50年度から52年度にかけて中世城跡の悉皆調査を実施した。文化庁補助事業によるもので、全国に先駆けての試みであった。市町村の文化財保護委員などに調査を委嘱した。成果は『熊本県の中世城跡』として県教委から昭和52年3月に発行されている。同書に掲載された城跡数は、463城跡。それまでは、江戸時代に編纂された『古城考』の276城であった。

⑤昭和59年度に、文化庁記念物課の服部英雄文化財調査官から、県教委に要請があった。「県内の中世城で重要なものをピックアップの上、中世城郭検討委員会ですべて説明して欲しい」ということであった。そこで県教委では、資料を作成し、当時、文化財保護主事の横尾泰弘氏と大田幸博が文化庁に出席して説明を行った。委員会には、石井 進教授（東京大学文学部）などが委員として名を連ねておられた。「説明を受けて、国指定候補の城跡を選出したい」との説明があった。熊本県を対象とした委員会は、7月16・17日と10月5・6日の2回に分けて行われた。

⑥昭和59年度から県教委では、九州縦貫自動車道（八代―人吉）建設に伴い、球磨郡山江村で中世城跡の調査を実施した。大規模な発掘調査により、山田城跡は、文献の記録通りに南北朝時代の山城であることが証明された。城跡地の南側区域の派生尾根からは凝灰岩の岩盤を掘り穿めた小型の建物跡が検出された。谷部からは、かぶら矢などの武器や輸入陶磁器が多量に出土した。谷部からは、野鍛冶跡の発見もあった。幸いなことに本体尾根筋は、路線外となり手つかずの状態に残った。一方、隣接地の「高城」は、文献に無い城跡であったが、調査の結果、大規模な平山城であることが判明した。シラス台地を加工したもので、自動車道はⅡ郭とⅣ郭を貫いた。ここでも、多数の掘立柱建物と輸入陶磁器が出土した。山田城が「山の城」、高城が「里の城」の関係にあることが分かった。両城跡の発掘調査は、2ヶ年を費やして実施され大きな成果を取った。

⑦平成5年度から、市町村誌編纂事業や城跡整備事業の中で、大田が各地の城跡調査に関係することになる。

特に、編纂事業における中世城跡調査は、昭和50～52年度に県教委が実施した「中世城跡の悉皆調査」を補填するものである。

⑧県教委は、平成10年3月に『熊本県遺跡地図』を発刊した。地図に掲載された城跡数は、542城跡。これによれば、県内94市町村の中で城跡を有しないのは、わずかに、阿蘇郡波野村、八代郡鏡町・泉村、球磨郡五木村に過ぎない（参照：50〔 3. 94市町村の城跡分布状況〕）。

⑨平成12年度に、三加和町から県教委へ「田中城跡の国指定申請」の相談があった。県教委では、文化庁記念物課と協議を重ねた後、説明のために11月に町長・町教委と上京した。その際、県教委では、近年の調査結果に基づいて、県内城跡の状況報告を行った。

⑩古い資料を紐解くと中世城郭検討委員会が、昭和59年度に選定した『熊本県の国指定候補城跡の一覧表』では、Aランクに6城跡、Bランクに8城跡が位置付けられている。Aは、最高ランクを意味する。しかし、当時の検討会から26年も経ており、今日新たな資料の作成が急務であることを実感した。

26. 熊本	A	田中城・筒ヶ嶽城・岩野嶽道祖城・上村城・鍋城・鞠智城
	B	竹迫城・須居城・猿返城・米山城・陣内館・豊福城・矢崎城・富岡城

⑪一覧表の城跡は、未整理の感がある。古代山城の鞠智城と、近世城の富岡城が含まれている。猿返城は、猿返城の誤記。当時、既に県指定史跡であった久玉城跡と隈部館の名が無い。ただし、隈部館が猿返城に言い替えられた可能性もあるが、その場合でも、猿返城がAでないのは、大きな疑問である。

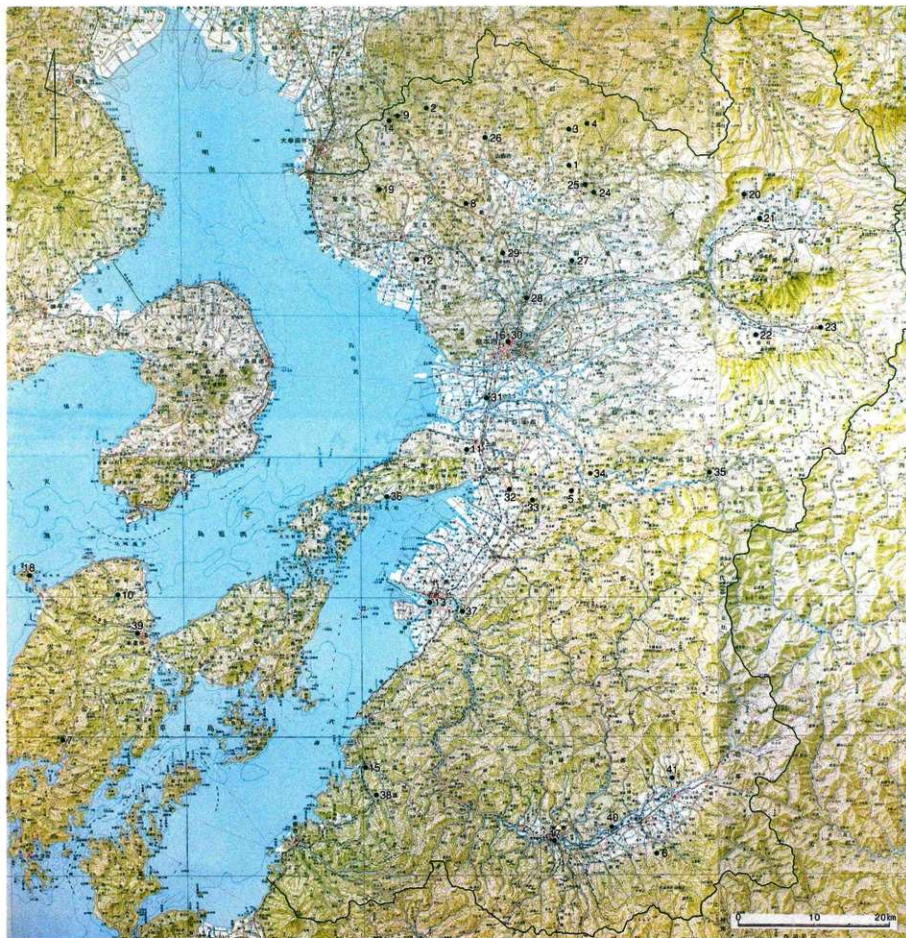
⑫新資料の作成は、平成12年12月から開始して、平成13年2月に完成した。内容を活性化しておくことが必要であるので、菊池町の隈部弘正町長からは「取り敢えず、太田補佐が指導されている『町内中世城調査』の報告書に掲載したらどうか」との助言があった。町では、隈部館の国指定申請を検討中である。

⑬今後については、この報告書を元に県教委で検討したい。最終的には『熊本県としての国指定候補の城』を選定し、文化庁へ報告するつもりである。

(大田幸博・富田弘海)

時代区分	城 数	特 記 事 項	該 当 城 名
古代山城	1	・国書に記された城数は11城跡。 ・九州に4城跡、県に1城跡。	鞠智城（県史・昭和34年）
中 世 城	533	・この中で、国指定史跡は1城。県指定史跡は3城。 ・宇土城は、名和氏の居城。 ・城数は県教委発行『熊本県の遺跡地図』による。	田中城（県史・昭和61年） 隈部館（県史・昭和49年） 宇土城（国史・昭和53年） 久玉城（県史・昭和48年）
中近世城	3	・近年の調査によって存在が明らかになった。 ・近世城と同様の石垣を持つ。 ・中世城と近世城の過渡期の城	麦島城（市史） 藤ノ原城 佐敷城（県史・昭和49年）
近 世 城	5	・調査が進行中のものは、熊本城・人吉城・富岡城。 ・熊本城は、本丸御殿の復元計画。人吉城と富岡城は、整備事業に伴うものである。	熊本城（特国史・昭和38年） 人吉城（国史・昭和36年） 八代城（県史・昭和38年） 宇土城（市史） 富岡城（町史）
合 計	542		

(注) 県史⇒県指定史跡・国史⇒国指定史跡・特国史⇒特別国指定史跡



第1図 熊本県の主要城跡位置図

国土地理院 1:200,000 「大分」「福岡」「熊本」「八代」「野母崎」

城跡番号	城名	主要城跡
1	嚙智城跡	5
2	田中城跡	7
3	隈津館跡	10
4	米の山城跡	13
5	堅志田城跡	16
6	永里城跡	19
7	河内浦城跡	21
8	萩原城跡	24
9	高森城跡	26
10	三川城跡	28
11	宇土城跡	30
12	伊倉城跡	30
13	麦島城跡	31
14	鷹ノ原城跡	34
15	佐敷城跡	37
16	熊本城跡	39
17	人古城跡	39
18	富岡城跡	40
19	筒ヶ嶽城跡	43
20	内牧城跡	43
21	二辺塚城跡	43
22	南郷城跡	44
23	高森城跡	45
24	城林城跡	45
25	菊池城跡	45
26	城村城跡	45
27	竹迫城跡	46
28	須屋城跡	46
29	岩野道祖城跡	46
30	古城跡	47
31	河尻城跡	47
32	豊福城跡	47
33	花山城跡	47
34	陣内館跡	48
35	愛媛寺城跡	48
36	矢崎城跡	49
37	八代古麓城跡	49
38	野角城跡	49
39	天草城跡	49
40	岩城跡	50
41	鍋城跡	50

1. 調査が実施されている城跡

〔1〕古代山城

鞠智城跡 きくち〔所在地：鹿本郡菊鹿町米原 きくか まいばら 調査主体：熊本県文化課〕

大和朝廷が、7世紀後半に築城した古代山城。東アジアの国際情勢が極めて緊迫したことにより西日本地方に配置された。大陸から、唐と新羅の連合軍による日本本土への進攻が予想されたのである。国書に記載されたのは11城で、未記載分を含めると26城を数える。朝廷は、対馬の金田城を最前線基地として、北部九州には大宰府を守るために大野城を築き、連合軍の上陸地点となる瀬戸内海沿岸の最奥には、高安城を配置した。当時の都が近畿地方にあったことによる。その中において、鞠智城は、佐賀の基肄城と共に後方支援基地の役目を担った。鞠智城の場合、取り分け内陸部に存在することから兵站基地と見なされる。前線に食料や武器を供給し、兵士を送りこんだのであろう。

城塞は、主に菊鹿町の米原台地に築かれている。土塁線と崖線^{いりよう}で圍繞された城域は約55haで、端部は菊池市堀切まで広がる。門礎石は城跡の南側ラインにあり、西側に「池の尾門礎石」、南側の中央に「堀切門礎石（伝・正門）」、東側に「深迫門礎石」が配列されている。いずれも原位置を留めないが、今年度の22次調査で、堀切門の原位置が確定された。

調査が本格化した平成3年度の13次調査以降、^{ころう}市内の古代山城として初の発見が相次いだ。鼓樓と推定される八角形建物跡や、谷部を利用した貯水池跡や貯木場跡は、全国的な話題となった。貯水池跡からは、文字の書かれた木簡も出土している。これまでに検出された建物跡は、67棟を数える。遺構は、三時期に区分される。

平成6年度から、県の自主事業として整備が行なわれている。平成11年度の「くまもと未来国体」までに、米倉・八角形建物・兵舎の復元建物が完成した。現在も、歴史公園の完成を目指して整備が進んでいる。

【参考文献】

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 「鞠智城跡(第1～6次)」熊本県文化財調査報告第59集 1983年 | 「鞠智城跡(第17次)」熊本県文化財調査報告第157集 1996年 |
| 「鞠智城跡(第10～12次)」熊本県文化財調査報告第116集 1991年 | 「鞠智城跡(第18次)」熊本県文化財調査報告第164集 1997年 |
| 「鞠智城跡(第13次)」熊本県文化財調査報告第124集 1992年 | 「鞠智城跡(第19次)」熊本県文化財調査報告第169集 1998年 |
| 「鞠智城跡(第14次)」熊本県文化財調査報告第130集 1993年 | 「鞠智城跡(第20次)」熊本県文化財調査報告第181集 1999年 |
| 「鞠智城跡(第15次)」熊本県文化財調査報告第146集 1994年 | 「鞠智城跡(第21次)」熊本県文化財調査報告第191集 2000年 |
| 「鞠智城跡(第16次)」熊本県文化財調査報告第152集 1995年 | |



第2図 鞠智城跡位置図



第3図 鞠智城跡全体図

※『鞠智城跡』（パンフレット）1997年



第4図 復元された米倉（20号建物）



第5図 復元された丘舎（16号建物）

〔2〕中世城

①田中城跡 あかつらに〔所在地：玉名郡三加和町和仁 調査主体：三加和町教育委員会〕

和仁氏（菊池氏の家臣）の居城。天文19年（1550）の『太友義鑑書状』『小代文書』『筑後田尻文書』に城主「和仁輝正忠」の記述がある。天正15年（1587）に勃発した「肥後の国衆一揆」では、和仁氏や迎春氏などの国衆が立て籠もる最終拠点となり、約1万の大軍に攻められて落城した。その際に、豊臣勢が作成した「迎春・和仁仕寄陣取図」は、日本最古の作戦図（山口県立文書館・毛利文庫蔵）として知られる。陣取図には、城を取り巻く木柵と物見櫓や、小早川氏・立花氏・鍋島氏などの各陣地が黒書きされている。有名な秀吉の「刀狩り令」は、この戦いが契機となった。

発掘調査は、昭和61年度から継続的に実施され、これまでに、数多くの掘立柱建物跡をはじめとして、深さ6mの鋭角V字堀・連棟式兵舎跡（推定）・物見櫓跡等が検出された。V字堀は、地山の凝灰岩を深く掘り進めたものである。一揆関連の遺物としては、鎧の小札・兜の前立・55個の鉄砲玉などが出土した。

城跡は、山付きの舌状形の独立丘陵に築かれており、主郭の平場を中心として、両側に副郭を持ち、先端部の張り出し箇所を堀切で断ち切っている。基本的に単郭形式の縄張りである。前出のV字堀は、主郭の段下を取り巻く格好となる。崖面は、いずれも顕著に削り出されて切り立っている。周辺の丘を見渡せば、陣取図に描かれた陣地跡も比定出来る。戦いでは、900人の兵が城内に立て籠もった。その意味では、逃げ込みの城である。主郭から検出された建物跡も急造りの構造をしている。県内最大級の平山城跡と位置付けられ、県史跡に指定後、中心部の主郭や西側区域の一部は整備されている。

【参考文献】

『田中城』三加和町田中城跡調査概報(1)	1987年	『田中城跡Ⅲ』三加和町文化財調査報告第9集	1995年
『田中城跡Ⅱ』三加和町文化財調査報告第2集	1988年	『田中城跡Ⅳ』三加和町文化財調査報告第10集	1996年
『田中城跡Ⅲ』三加和町文化財調査報告第3集	1989年	『田中城跡Ⅴ・Ⅵ』三加和町文化財調査報告第11・12集	1997年
『田中城跡Ⅳ』三加和町文化財調査報告第4集	1990年	『田中城跡Ⅶ』三加和町文化財調査報告第13集	1998年
『田中城跡Ⅴ』三加和町文化財調査報告第5集	1991年	『田中城跡Ⅷ』三加和町文化財調査報告第14集	1999年
『田中城跡Ⅵ』三加和町文化財調査報告第6集	1992年	『田中城跡Ⅸ』三加和町文化財調査報告第15集	2000年
『田中城跡Ⅶ』三加和町文化財調査報告第7集	1993年	『田中城跡Ⅹ』三加和町文化財調査報告第16集	2001年
『田中城跡Ⅷ』三加和町文化財調査報告第8集	1994年		

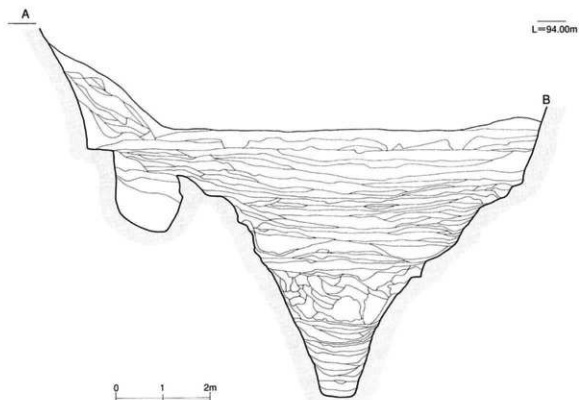


第6図 田中城跡位置図



第7図 田中城跡全体図

※「田中城跡」1997年



第8圖 主郭西側空堀・断面実測図

※『田中城跡Ⅲ・Ⅳ』1997年。



第9図 辺春・和仁仕寄陣取図
(山口県立文書館・毛利文書蔵)

※『田中城跡Ⅲ・Ⅳ』1997年

②隈部館跡 【所在地：鹿本郡菊鹿町上永野 調査主体：菊鹿町教育委員会】

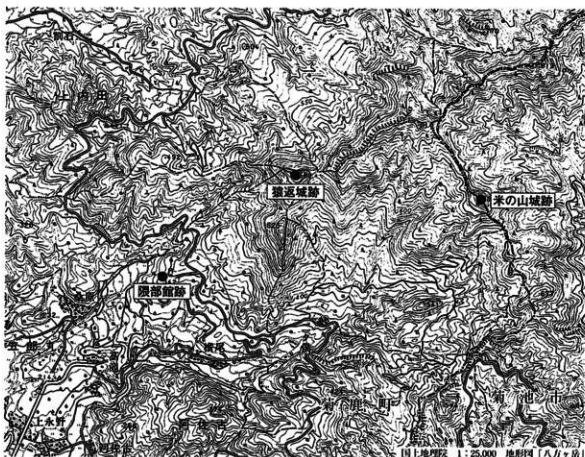
城主の隈部親永は、国家一揆の中心人物である。館名は、県指定史跡になった際の造語で、江戸時代の『肥後国誌』や『古城考』等には「猿返城」と記述されている。地元では、親しみを込めて「隈部さん」と呼んでいる。標高350mの扇形をした山腹中に館跡がある。菊鹿町の北東城には、標高1051mの八方ヶ岳を中心とする高山が連なっており、その末端城にあたる。館跡は、馬蹄形の尾根に取り囲まれ、どこからでも良く目立つ。上永野地区には、大規模な麓集落が展開していたものと思われる。館跡の麓から1.9km離れた集落の三差路に「構口」という地名が残っている。

縄張り、は、単郭形式であるが、主郭の南側に大きな堀切を挟んで「馬屋」と呼ばれる小規模な張り出し区画を持つ。二つの平場の形状は、基本的に方形をなす。緩傾斜地の虎口は、完全な峠型をなし、壁面は野面積みの石垣で構成されている。主郭の入口は石段に変化する。この箇所を見る限り、近世城そのものの造りである。「馬屋」周囲の上壁にも、所々に積み石が露呈しており、石垣の埋没が確実視される。

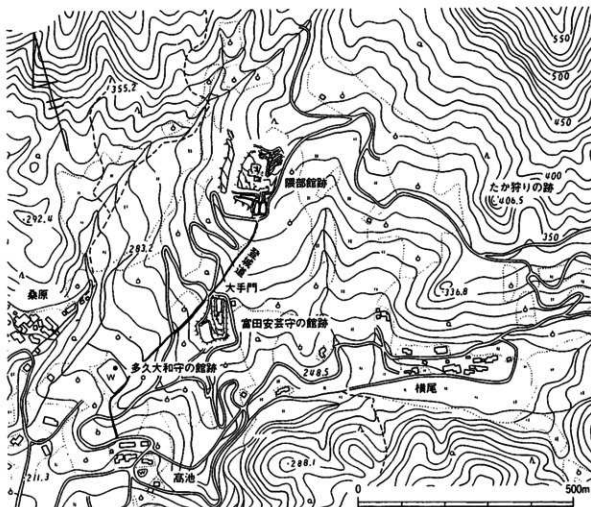
主郭には、良好な状態で礎石建物跡や庭園跡が残っている。昭和49年度に行われた町教委の発掘調査で検出されたものである。現在は、検出遺構を生かした歴史公園となっている。礎石建物跡は、南北に2棟並んでおり、南側が主殿、北側が会所と推定されている。立行を配し、泉水を有する庭園跡は、会所の東側にある。会所の北側には、湧石が方形に散乱している箇所がある。ここに3つの小穴があり、周りに小石が環状に配列されているのも興味深い。何らかの建物跡であろう。

周辺の高山には、地元で「城床」と呼ばれる猿返城（館を含めた城名であるが、今日、限定的な城名となっている）や、米の山城の砦跡が残っている。県内で紛れもなくトップクラスに位置する城館跡である。

【参考文献】『隈部館跡』 菊鹿町文化財調査報告第2集 1993年 「菊鹿町史」菊鹿町 1996年

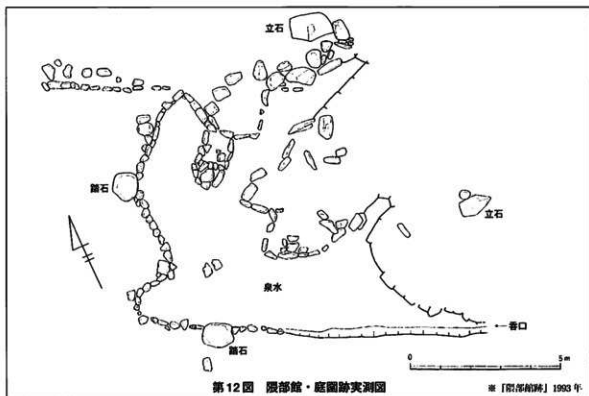


第10図 隈部館跡位置図



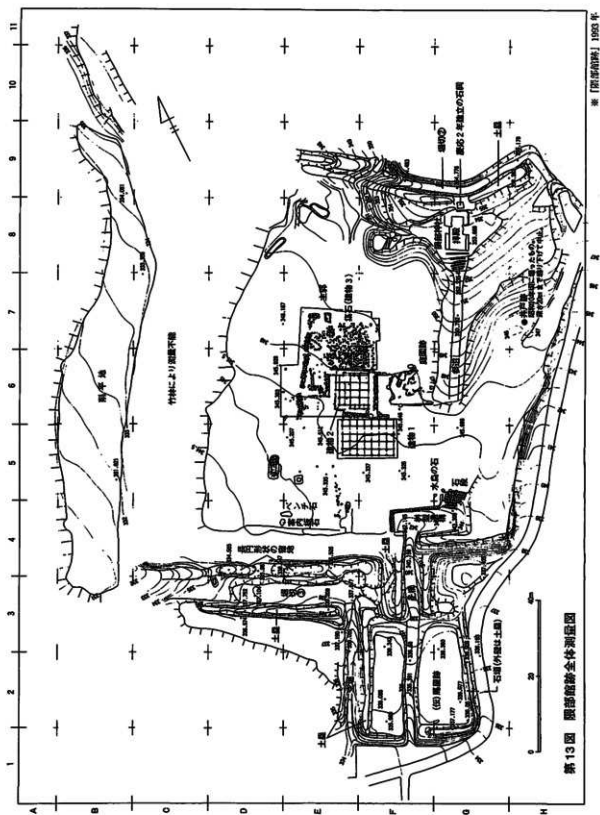
第11図 腰部館跡周辺地形図

※「腰部館跡」1993年



第12図 腰部館・庭園跡実測図

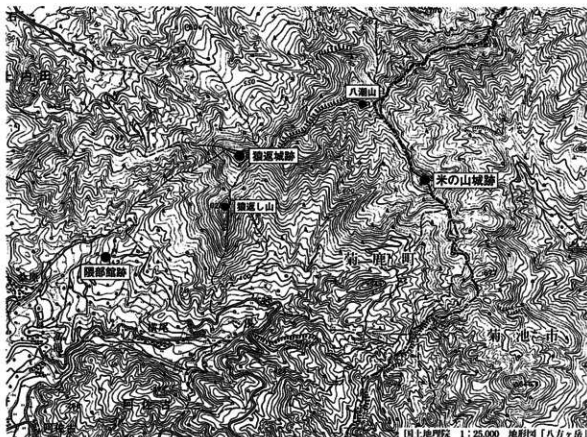
※「腰部館跡」1993年



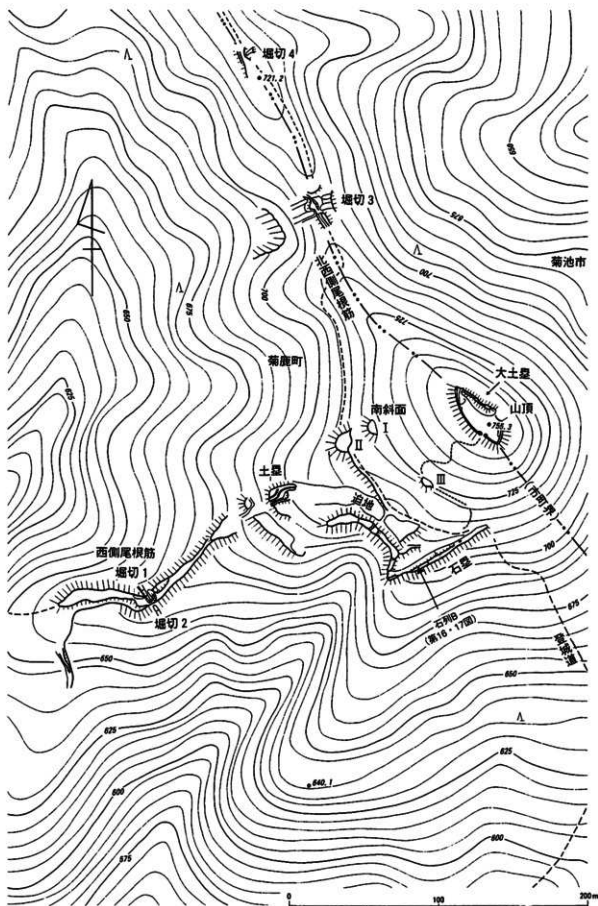
おとこ

南側裾部の山中には「上園い」・「下園い」の地名を残す小集落がある。高山に築かれた石塁を伴う砦として注目される。

「飯返城跡 米の山城跡Ⅰ」菊鹿町文化財調査報告第3集	1997年	「米の山城跡Ⅲ」菊鹿町文化財調査報告第6集	1999年
「米の山城跡Ⅱ」菊鹿町文化財調査報告第4集	1998年	「米の山城跡Ⅳ」菊鹿町文化財調査報告第7集	2000年

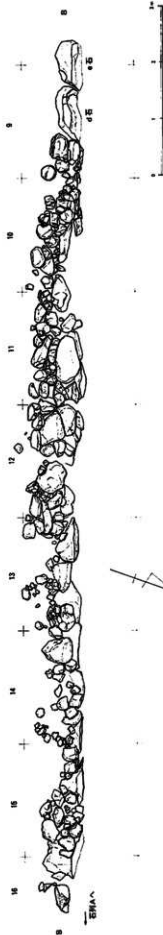


第14図 米の山城跡位置図



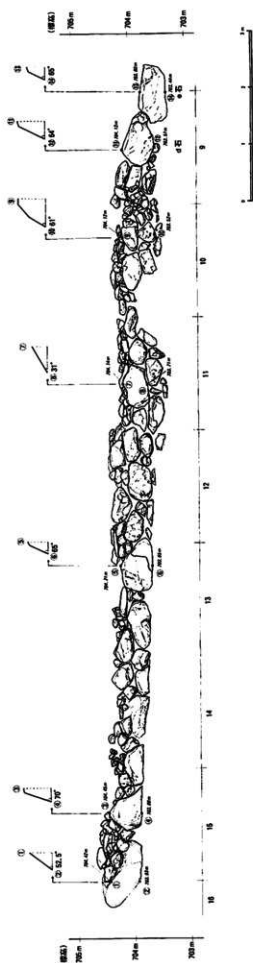
第15図 米の山城跡周辺地形図

※『米の山城跡Ⅱ』1998年



第16図 石列B上面実測図

※「糸の山麓跡Ⅱ」1998年



第17図 石列B断面実測図

※「糸の山麓跡Ⅱ」1998年

かし だ しゅうほう なかこむり
④ 堅志田城跡 【所在地：下益城郡中央町中郡 調査主体：中央町教育委員会】

肥後の中央部に位置し、天正10年（1582）に薩摩の島津氏が肥後へ進攻した際は、阿蘇氏の最前線基地となった。島津氏は城の西面に、付け城の「花の山城」（下益郡豊野町）を築いて攻撃した。天正13年に、阿蘇氏重鎮の甲斐宗運が亡くなると争いが激化して、島津勢の一斉攻撃により落城した。しかし、世の中は、直後から近世社会に向かって急ピッチで展開した。天正15年に豊臣秀吉の九州出兵があり、天正17年には、肥後の国衆一揆が鎮圧された。この意味から、島津氏の野望を最後まで押し留めた戦国城であった。

昭和62年度から継続して、城域の測量調査や、Ⅰ郭とⅡ郭で発掘調査が行われている。東西に延びる主軸尾根は、長さ320mに及ぶ。枝分かれしている小尾根を含めて合計7箇所、平場を造り出し、14本もの堀切を刻んでいる。中心地はⅠ～Ⅱ郭である。堀切には、障子堀の変形や畝堀が混じっている。さらに、尾根の末端部は、瘦せ馬の背中の様な地形に削りを加えて、土塁状に仕立てている。Ⅱ郭からは、花崗岩の、ばい風岩盤を掘り穿めた5棟の大型竪立建物跡が検出された。建て替えられており、主殿と副殿の関係と思われる。Ⅰ郭からも大型建物跡が検出された。凝灰岩の岩盤を断ち切ったⅠ～Ⅱ郭間の堀切からは「薬門」跡も発見されている。北東側の麓には「椿」集落がある。

他方、南西側の派生尾根も、長さ300m弱で、3本の堀切が刻まれている。ただし、山頂部分の削平度合いは、主軸尾根に比べるとかなり低い。堅志田城の副郭であろう。この尾根の裾部には、熊取集落がある。

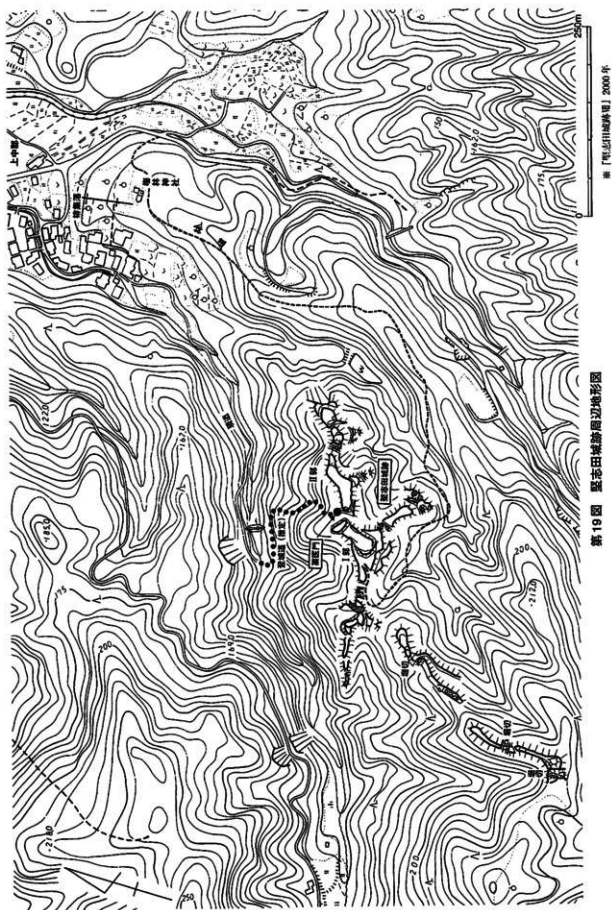
近年の調査で、谷を挟んだ東側の別尾根筋にも、3本の堀切が確認されている。Ⅱ郭の発掘調査で、16世紀代の輸入陶磁器が、数多く出土した。県内最大級の山城で、阿蘇氏と島津氏の合戦の模様は、島津氏の家老が記した「上井覚兼日記」に詳しい。

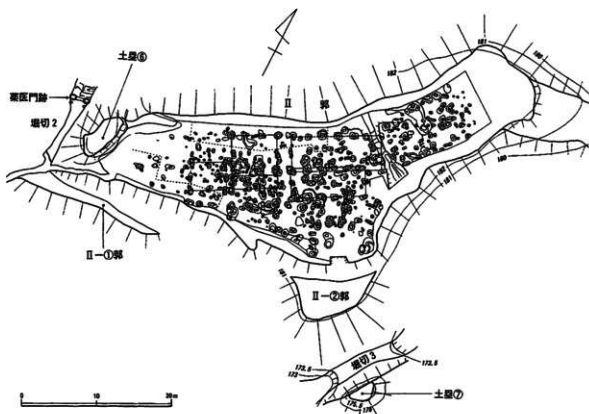
【参考文献】

「堅志田城跡 四十八屋古蹟」中央町文化財調査報告第1集	1989年	「堅志田城跡Ⅵ」中央町文化財調査報告第6集	1998年
「堅志田城跡Ⅱ」中央町文化財調査報告第2集	1993年	「堅志田城跡Ⅶ」中央町文化財調査報告第7集	1999年
「堅志田城跡Ⅲ」中央町文化財調査報告第3集	1994年	「堅志田城跡Ⅷ」中央町文化財調査報告第8集	2000年
「堅志田城跡Ⅳ」中央町文化財調査概報(第4集)	1995年	「堅志田城跡Ⅸ」中央町文化財調査報告第9集	2001年
「堅志田城跡Ⅴ」中央町文化財調査報告第5集	1997年		

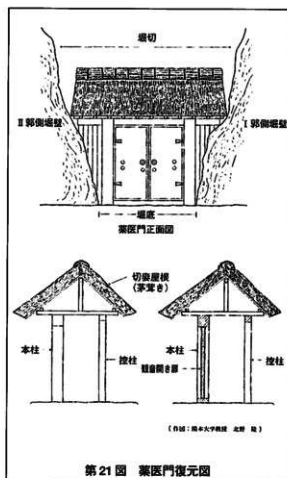


第18図 堅志田城跡位置図

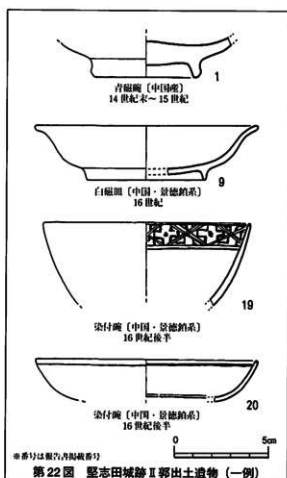




第20図 II郭測量図



第21図 薬医門復元図



第22図 堅志田城跡II郭出土遺物(一例)

※『堅志田城跡』2000年

ながさと うまひらう
⑤永里城跡 【所在地：球磨郡上村上 調査主体：上村教育委員会】

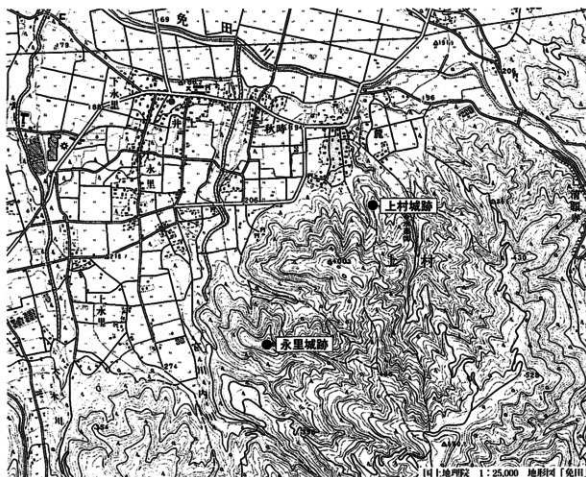
球磨郡の南東部に位置しており、南北朝から永里氏の行動が文献に見える。文安5年(1448)には、相良長統勢が「永里之山城」を攻めており、この時期、永里氏も滅んだと考えられる。戦国期になると、大永5年(1526)に入古城に内紛があり、相良瑞環は、長唯に追われて、永里城主の落合加賀守を頼って永里城へ逃れた。『八代日記』大永6年5月16日条に「永里落城、永里方退出」とある。

中球磨地区の町村合併を前に、上村では、永里城跡をメモリアル・エリアとして整備する計画を立て、平成12年度から城跡の測量調査に取り組んでいる。次年度は、発掘調査が予定されている。

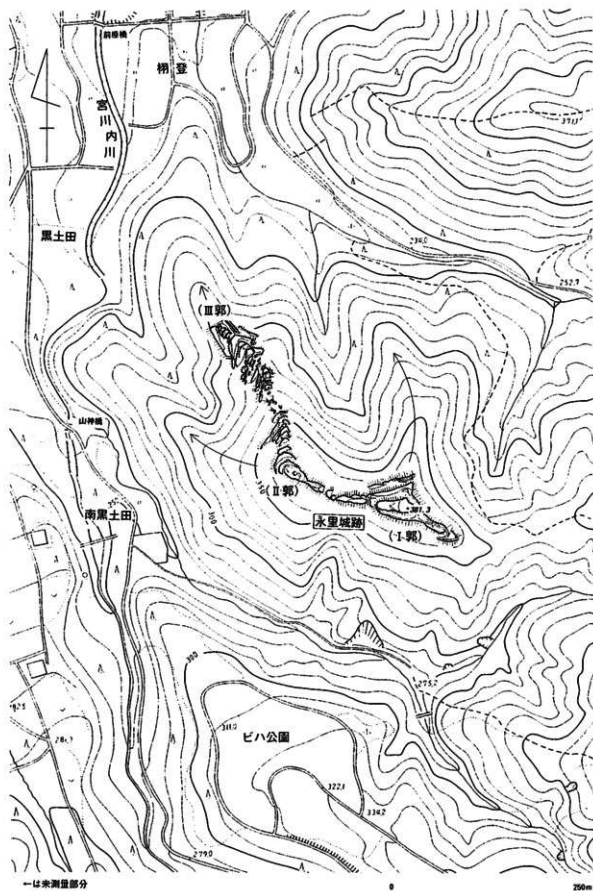
城跡は、瘦せ馬の様な形状をした尾根筋(標高381.30m)に展開している。主軸ラインには、ラクダの瘤の形をした二つの頂き(Ⅰ・Ⅱ郭)と、削平された平場(Ⅲ郭)がある。これらを核としながら、北西側に下る尾根筋に、幾段もの小段が続いている。小段群については、間に堀切や土塁を挟んでおり、段差面の削り落としても顕著である。この遺構は、防禦施設であると共に、有事の際に「住民が逃げ込む」場と考えられる。Ⅲ郭も同様な機能を果たした区画であろう。ここは周辺の守りも固く、直下には土塁と空堀が巡っている。取り分け、土塁には、扁平な川原石が積まれたり、貼り付いた筒もある。集落に面する所で、一部は、張り子の虎の様な石塁であったと思われる。

西側の山腹には、寺跡と伝わる削平地があり、大型の五輪塔が散在している。山城と寺の先後関係も注目される。概して、大規模土木工事の痕跡を残す「逃げ込みの山城」である。堀切や土塁の造りは、急峻への感があり興味深い。これらについては、非常時の作時と見なされる。戦さの記述に見合う遺構であろう。

【参考文献】『永里城跡Ⅰ』上村文化財調査報告第1集 2001年



第23図 永里城跡位置図



第24図 永里城跡周辺地形図

※「永里城跡」2001年

かわも うら かわうら
 ⑥河内浦城跡 【所在地：天草郡河浦町河浦 調査主体：河浦町教育委員会】

天草郡の下島に位置しており、天草氏の本城と伝えられる。天草で、元和元年（1615）の「一国一城令」の適用を受けた六城の内の一城。最後は、破城されたものと思われる。城跡は、带状に延びる小山を利用した半郭形式の平山城である。先端部の平場が主郭で北側鞍部の堀切は、岩盤を粗く断ち切る。ただし、堀切から先の北側尾根にも、東側の山腹に計3条の堅堀が下るので、城域は、ここまで拡大することになる。

主郭の南下は、周囲より一段高く、今日、崇徳寺の境内である。境内下を「田川」が流れており、かつて、この地が、館の敷地であったことは、容易に察しがつく。館と詰めの城がセットになったものである。

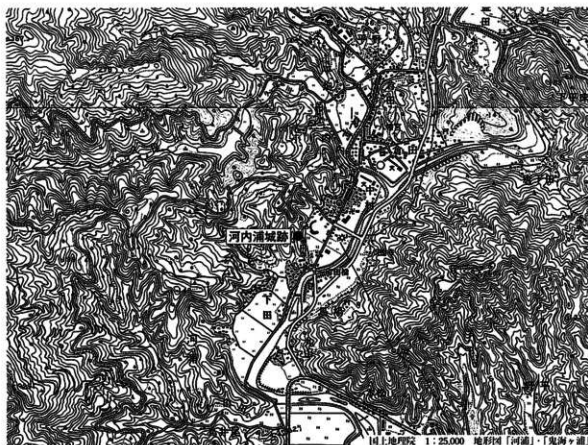
発掘調査は、平成元年と3年度に実施された。結果として、主郭は、全掘の状態となった。全部で5棟の掘立柱建物跡と、ゴミ穴が発見されたこともあって、多くの輸入陶磁器が出土した。その中には、ベトナム系の大皿や、多量の糸切りの土師器があった。これらの成果をもとに、平成12年度に、農林水産省の補助事業として、城跡の整備が行われたが、その際に、堀切の補足調査が実施され大きな発見があった。堀切からの出土瓦が、近世・富岡城跡の出土瓦と一致したのである。これらは、普通瓦より一回り小振りの素焼き瓦で、非常に硬質なのを特色とする。このことによって「寺沢弘高が、富岡城を築くにあたり、天草氏の河内浦城の屋根瓦を、一部徴用したのではないか」との推論に至っている。

館と詰めの城がセットとなったもので、館に重きを持つタイプの城と考えられる。出土瓦の特異性から注目される城跡である。現在、城跡には、櫓が復元され、検出遺構を意識した木造の瓦葺屋根の休憩所が建っている。

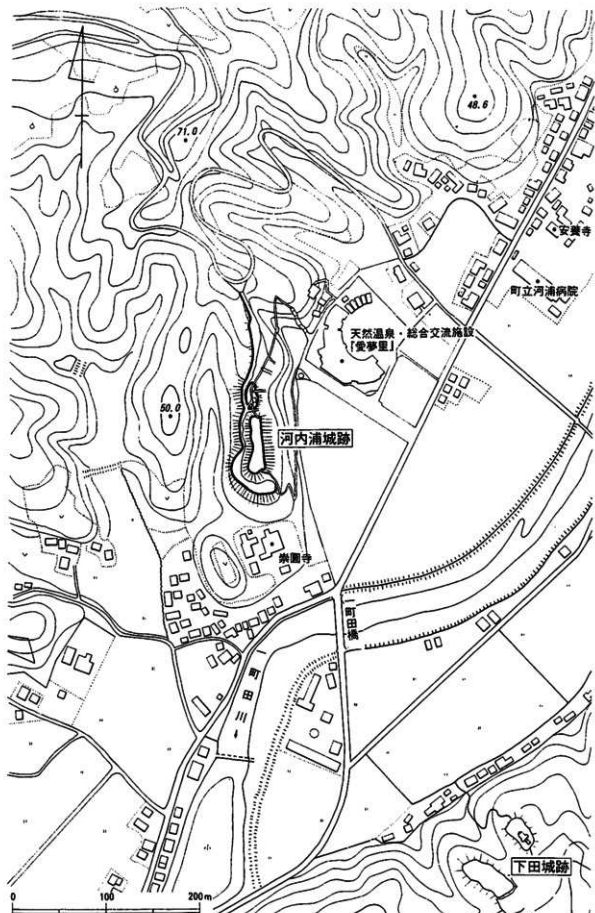
【参考文献】

『河内浦城跡』河浦町文化財調査報告第1集 1990年
 『河内浦城跡Ⅱ』河浦町文化財調査報告第2集 1992年

『河内浦城跡Ⅲ』河浦町文化財調査報告第4集 2001年



第25図 河内浦城跡位置図



第26図 河浦地区周辺地形図

※「河内浦城跡」2001年

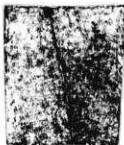
小振り瓦と標準サイズ瓦の比較



1. 河内浦城 (小振り)



2. 富岡城 (小振り)

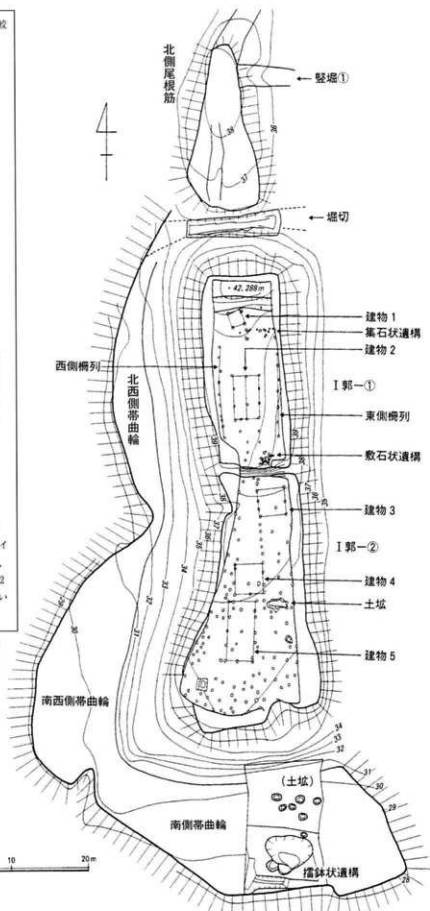


3. 富岡城 (標準サイズ)

※富岡城跡から出土した標準サイズの瓦の大きさは、上弦幅28cm、下弦幅26cm、長さ32cm、厚さ2.2cm。1・2の瓦は、一回り小さいことが分かる。

第27図 出土瓦の比較

※『河内浦城跡Ⅲ』2001年



第28図 河内浦城跡全体測量図

はまわら きくすい しょうない
 ⑦萩原城跡 【所在地：玉名郡菊水町萩原・城内 調査主体：菊水町教育委員会】

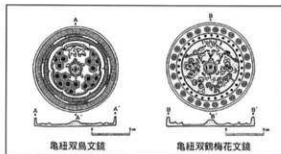
『肥後国誌』によると、初め内田相良氏が在城し、天文年間頃に落城した。天正年間には永野氏が居城し、同7年、隈部氏に攻められて再び落城した。萩原本村の東手にある比高差178.6mの高山が城跡。山腹は、急峻で要害堅固な山城。尾根は、瘦せ馬の背のようで、岩盤を断ち切った3本の大規模な堀切が特徴である。特に、Ⅱ郭直下の堀壁は急峻に削り落されて、絶壁に近い形状をなす。山頂のⅠ郭と、その直下に延びる尾根筋のⅡ郭は完全な削平地である。Ⅰ郭の北西側には土塁が積まれ、Ⅱ郭は「馬攻め場」と呼ばれる。尾根筋に井戸は無く、北側麓の「水汲み谷」から岩清水を運び上げたのであろう。集落の最上部の「お花畑」箇所は館跡と思われる。

直接的な麓集落は、带状の谷部に開かれた萩原本村であるが、隣村の諸井や、東の山向こうの鹿央町寺米野にも、萩原城跡への登城口があるところから、広域的な支配網の存在が伺われる。寺米野地区は、米野山城跡の麓集落と考えられるが、実際の所、地元では萩原城跡との強い繋がりが口承されている。(伝)永野氏の墓も実在し、萩原城跡への登城口沿いに「お花畑」箇所がある。『肥後国誌』は、萩原村を米野村の内と注記している。『元禄国絵図』も「米野村の内萩原村」とある。

萩原本村と寺米野には、3枚の和鏡が伝世しており「萩原城に関する鏡」との言い伝えがある。この中で「亀紐双鳥文鏡」と「亀紐双鶴梅花文鏡」には、戦国時代の様式が感じられる。岩盤を断ち切った尾根筋の堀切と、麓集落のあり方に大きな特徴がある。

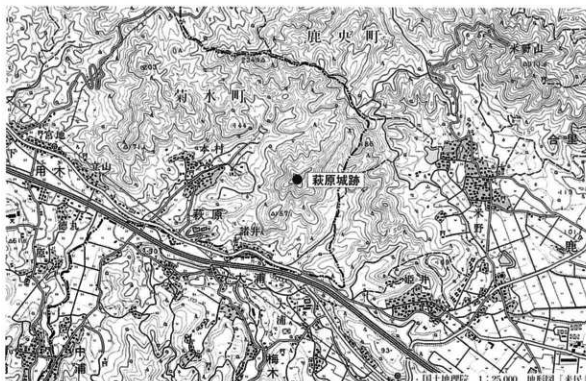
町史編纂事業の一環として、平成10年度に測量調査と周辺調査が実施された。

【参考文献】『焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』
 菊水町文化財調査報告第14集 1999年

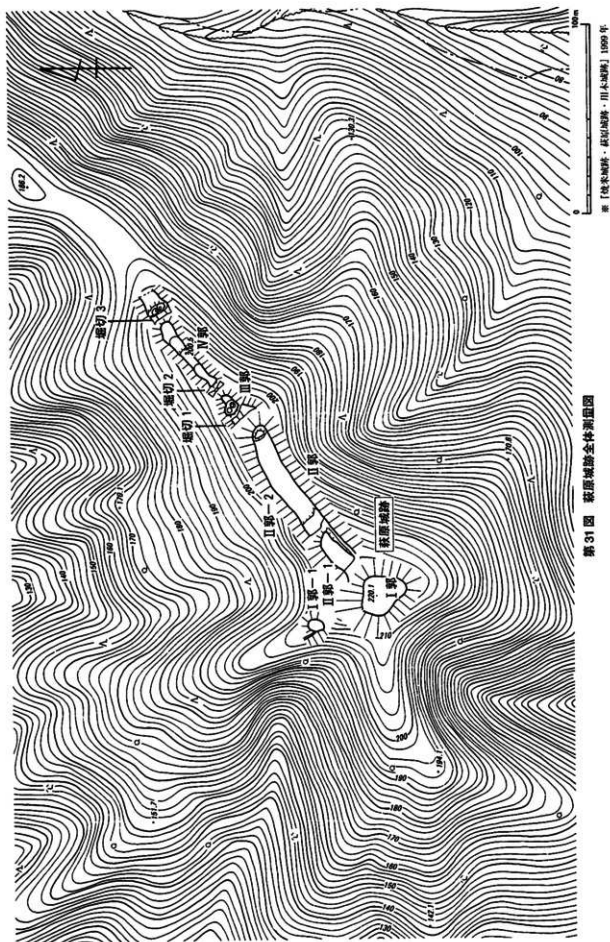


第29図 萩原城・伝世和鏡

※「焼米城跡・萩原城跡・用木城跡」1999年



第30図 萩原城跡位置図



つづろがだけ なんとん ききひがし
 ⑧ 葛嶽城跡 【所在地：玉名郡南関町関東 調査主体：南関町教育委員会】

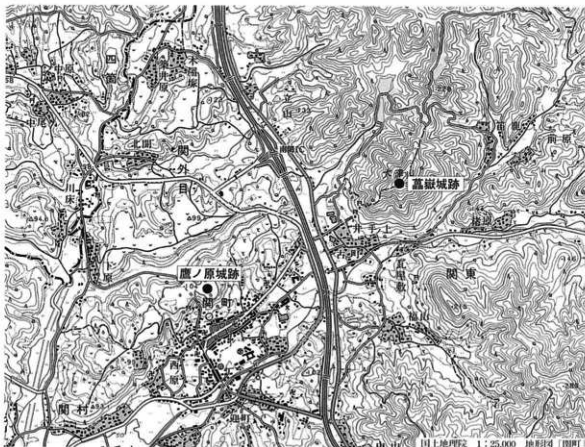
『古城考』では、応永年間、大内山氏が城主という。肥後北辺の独立小国衆の一人であろう。天文19年(1550)には、菊池義武を鎮王した大友義龍が、小原鑑元を城代とした。その後、龍造寺家信が城を預ったが、天正12年(1584)、島津方に討ち取られると大内山氏が地位を回復した。豊臣秀吉の九州出兵では、同15年4月1日「大内山之城御受取被成城」と『薩摩草』にある。加藤清正の時代は、加藤正次が城代となった。正次は、慶長5年(1600)に鹿野原に城を築き、葛嶽城は廃城となったという。

関町の北東側にある比高差189.5mの高山が城跡。山頂部分に二段の削平地があり、上段が「本丸」、南西側の下段が「二の丸」。本丸の南側と二の丸の北西側には、近世的な石垣が残っている。さらに山頂を挟んで、南西側と北東側へ下る尾根筋にも遺構がある。南西側は急傾斜尾根で、2箇所の平場があり、下段は「三の丸」。各平場の名称は『慶長国絵図』の「葛嶽城の城絵図」の書き込みによる。

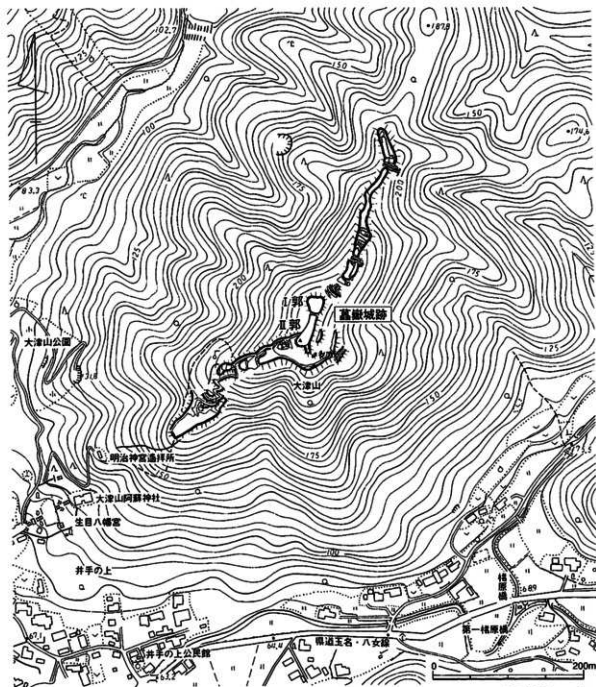
一方、山の鞍部にあたる北東側は、緩傾斜をなし、瘦せ馬の背中の様になっている。ここには、堀切が3か所にある。山頂直下のものは、大規模造りの二重堀で特筆すべき遺構である。3箇所とも、岩盤を断ち切っている。「二の丸」東側の小規模な尾根にも、帯状の平場や2本の堀切がある。三の丸の北西側の端部から縦堀状の開削谷が下る。

町史編纂事業に伴い、平成6年度に発掘調査が実施された。本丸からは、3棟分の礎石建物跡が検出された。Ⅱ部から遺構は検出されなかったが、地権者によれば、終戦直後の開墾の際に、本丸と同様な石列が出土したという。出土した陶磁器は、大半が中国産で、中には朝鮮半島産もあった。時間的に16世紀後半から17世紀初頭のものである。山頂に近世的な石垣を築き、礎石建物を有する戦国時代後半の山城として注目される。

【参考文献】『葛嶽城跡』南関町文化財調査報告第2集 1995年



第32図 葛嶽城跡位置図



第33図 基壇城跡周辺地形図

※『基壇城跡』1995年



第34図 基壇城跡出土遺物 (一例)

※『基壇城跡』1995年

⑨三川城跡 【所在地：天草郡五和町上野原 調査主体：五和町教育委員会】

中世文書や、江戸時代の城郭書や地誌にも城名の記載は無い。地元では「三川城」・「上野原城」として言い伝えてきた。三川城の城名の由来は、城地で3本の川が合流することによる。内野川の上流域に所在する城跡で、北北西2km先に下内野城跡、南南西1.4km先に城木場城跡がある。中間位置にある三川城跡からは両城跡を望める程の近さである。全長319mの大規模な平山城で、北側から南側へ三つの郭が並んでいる。鞍部の南端に大規模な堀切がある。中心部は、北端の1郭高台で、東側と南側の直下には、削平地が巡る。麓集落は、城地の南西側と北東側に展開する。天草の城は、海岸沿いと内陸のものに二分されるが、後者の部類に属する。

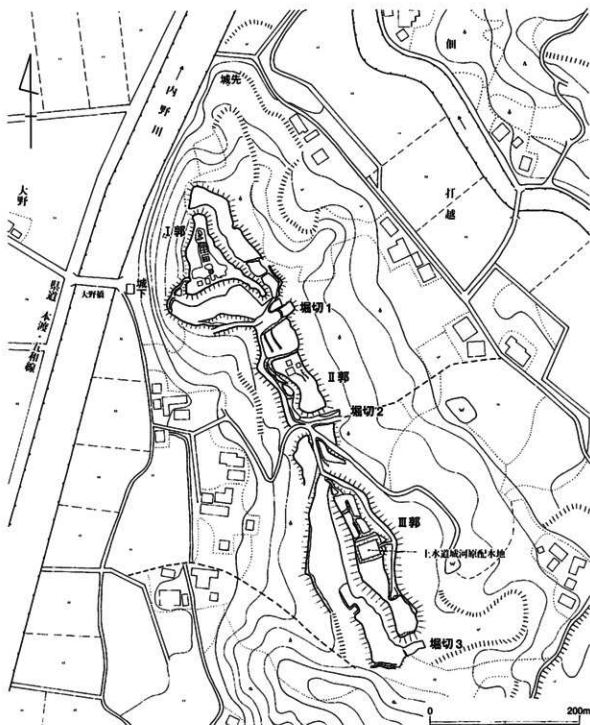
町史編纂事業に伴い、平成7年度に発掘調査が実施された。城跡の中心部をなす1郭の平場からは、2棟の掘立柱建物跡が検出された。これらは、同時代に存在したもので、内、1棟には庇が巡っていた。規模は小さいものの、主殿と副殿といった感じが強い。さらに、建物区域の段下がり部分から検出された土壌は、烽火穴と思われる。出土遺物は、14世紀後半～15世紀の青磁を上限とし、16世紀後半～17世紀初頭の染付けを下限とする。16世紀前後の三彩陶器も出土した。多くの遺物は、儀式に使用されたのであろう。日用雑器の出土は、皆無に近かった。1郭の建物に重複は見られないが、城地は、幅広い年代に渡って使用されたものと思われる。平成6年度に発掘調査が行われた隣接地の下内野城とは、戦国時代の末期に並存したことも判明した。

文献未記載でありながら、天草では、最大級の平山城である。多くの輸入陶磁器が出土し、主殿と副殿と考えられる掘立柱建物跡が検出されたことで注目される。

【参考文献】「三川城跡」五和町史資料編(その5) 1996年

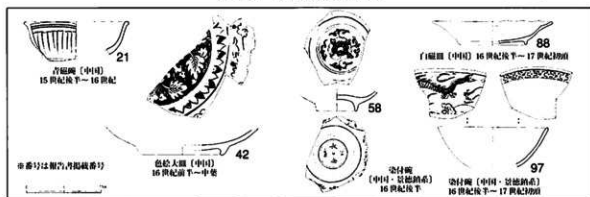


第35図 三川城跡位置図



第36图 三川城跡周辺地形図

※「三川城跡」1996年



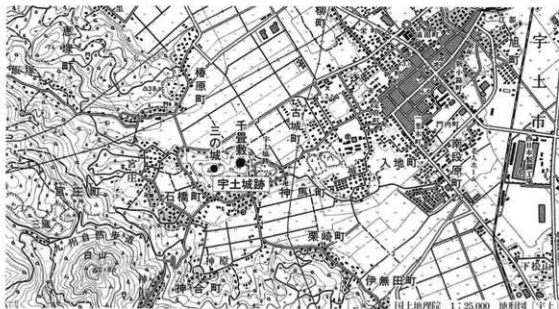
第37图 三川城跡出土遺物 (一例)

※「三川城跡」1996年

う と し め せんじょうじき
⑩宇土城跡 【所在地：宇土市神馬町千畳敷 調査主体：宇土市教育委員会】

国指定史跡であるが、近年、整備と調査が行われているので、参考事例として記す。名和氏の居城。平山城で「千畳敷」「三の城」からなる。現在、宇土市は、文化庁国庫補助事業により「千畳敷」箇所を整備中。平成12年度には、遺構明示を兼ねた休憩所を建設予定。同所東側の段落ち削平地から、掘削が中止された空堀を検出。

【参考文献】『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告第1集 1977年
 『宇土城跡(西岡台)Ⅱ』宇土市埋蔵文化財調査報告第18集 1988年
 『宇土城跡(西岡台)Ⅲ』宇土市埋蔵文化財調査報告第21集 2000年



第38図 宇土城跡位置図

いくる
⑪伊倉城跡 【所在地：玉名市片諏訪・中城 調査主体：玉名市教育委員会】

近年、学術調査が行われ、成果が上っているので参考事例として記す。城名は造語。調査区の地名は「土井の内」、近隣地に「中の城」。丘陵地で、住宅地となっている。空堀から獸骨(馬の頭・犬・亀)が出土。遺物は、12～13世紀に集中している。



第39図 伊倉城跡位置図

〔3〕中近世城（戦国末期から近世初頭の城跡を意味する造語である。）

① 麦島城跡（所在地：八代市古城町 調査主体：八代市教育委員会）

天正16年（1588）に、佐々成正が肥後の国衆一揆の責により刑死すると、肥後は、北部を加藤清正、南部を小西行長が領した。麦島城は、この頃、行長の家臣・小西行重によって築かれている。慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いで行長が敗死すると、清正が八代を含む南部も領し、忠広の代では、加藤正方が麦島城の城代となった。元和元年（1615）の「一国一城令」では適用を受けることなく存続した。しかし、元和5年（1619）3月17日の地震で崩壊したと城歴にあり、麦島城の存続期間は、30年強の短期間だったことになる。正方は、直ぐに松江で築城に取りかかり、同8年（1622）2月に松江城を完成させている。これが、今の八代城（松江城）である。

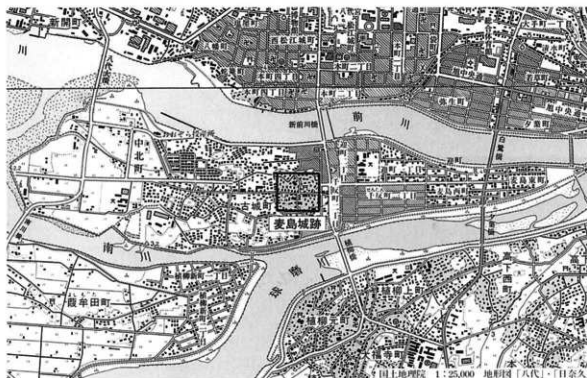
八代市文化課では、平成8年度から古城町の都市計画道建設予定地（以下、計画道）で発掘調査を実施している。平成12年1月には、シルバーワークプラザ建設地（以下、プラザ地）でも調査を行った。城跡地は、球磨川と前川に挟まれた古城町のデルタ地帯である。市街地で、調査前は「天守」箇所に石垣の積み石が残る程度であった。市文化課では、地籍図等を元に東西・南北400mの範囲に城域を設定した。照合すると、計画道は城域の北側を東西に突き抜け、プラザ地は、城の南東端に該当した。

調査の結果、本丸跡の東西で石垣が検出された。石灰岩の野面積みで、裏込めには川原石が使用されていた。大型建物跡は7棟を数え、礎石建物と掘立柱建物とがあった。5基の石組遺構は、枘方に掘り窪めて石組みしたものである。デルタ地帯ゆえの排水処理施設との見方がある。その他、井戸跡を5箇所、堀跡を3箇所検出した。主な出土遺物に、桐紋の瓦見、16世紀代の陶磁器、鉄釘、渡米銭があった。短い城歴ではあるが、石垣も積み直されており、3回程度の改修工事を確認した。土層観察では、地震の痕跡を確認するに至っていない。近世初頭の平城の実態を知る上で、貴重な城跡である。

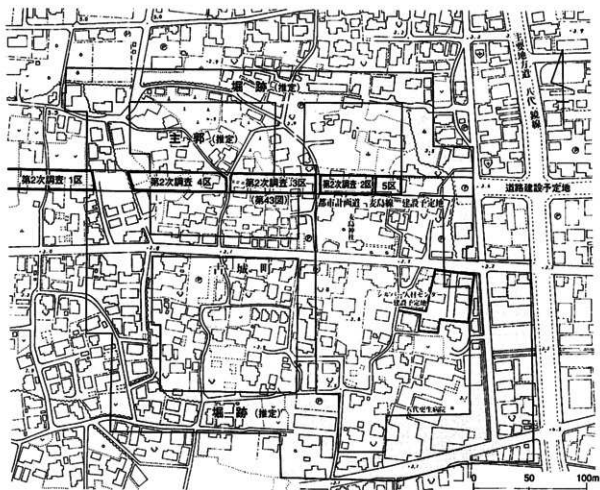
【参考文献】

『八代市史』第4巻八代市史編纂協議会 1974年
『麦島城跡発掘調査資料』八代市教育委員会文化課 2000年
『麦島城跡発掘調査について』熊本史学 2000年

『シンポジウム麦島城』熊本日日新聞 2000年
『発掘調査からみた近世初頭の八代城（麦島城）』八代市教育委員会文化課 2001年
『麦島城跡発掘調査について』肥後考古学会報告資料 2001年

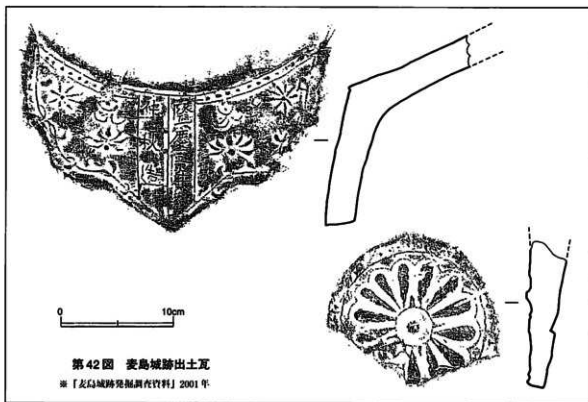


第40図 麦島城跡位置図



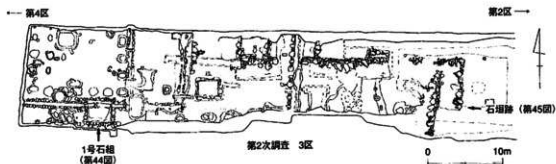
第41図 秦島城跡想定図

※原図：八代市教育委員会提供
トレース：溝口貞由美

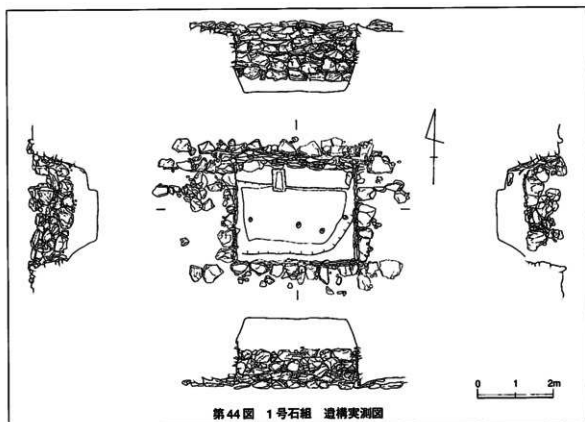


第42図 秦島城跡出土瓦

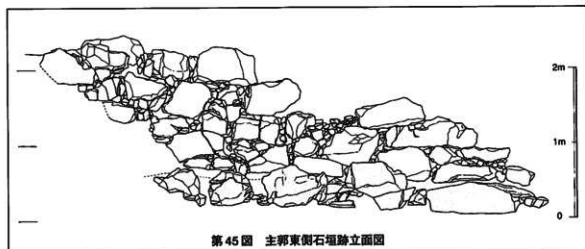
※『秦島城跡発掘調査資料』2001年



第43図 H11・12年度 麦島城跡遺構配置図



第44図 1号石組 遺構実測図



第45図 主郭東側石垣跡立面図

※原図：八代市教育委員会提供 トレース：溝口良由美

たかのほろ せきさき
 ② 鷹ノ原城跡 【所在地：五名郡南関町関町 調査主体：南関町教育委員会】

『肥後国誌』に、縄張りや城壁が詳しく記載されている。要約すると「平城で、本丸は東西53間、南北53間。本丸の北側に二の丸がある。東西120間、南北40間。本丸から四間半低い所に三の丸がある。東西140間、南北70間、高さ50間。曲輪の総面積700間」。城歴には「加藤清正の家臣の加藤正次が新城を築き、葛原城からこの城へ移ったが、元和元年の一国一城令で破壊して去った」、「筑後からの帰路の途中、加藤清正が自ら縄張りを行って新城を築かせた」という諸説がある。

役場の裏山に城跡がある。町教委では平成7年度から、学術調査を実施しており、熊本県では、佐敷城跡や富岡城跡に次いで破城の実態が明らかになった。完全に埋め込まれており、一個の積み石でさえ露呈していなかったが、本丸西側斜面から、長さ35m・残存の高さ8mの石垣が検出された。凝灰岩を使った布目崩し積みで、この箇所に限っては、熊本城の天守台・石垣を見る様な大きさがある。角石は2石のみの残存で算本積みの様相を呈している。本丸の北西端からは櫓台が確認され、これを巡る二面の石垣が出土した。近接から出土した甃瓦片は、この櫓のものであろう。18基の瓦溜めも検出されている。また、本丸虎ノ門跡も一箇所検出されており、櫓門の存在が考えられる。

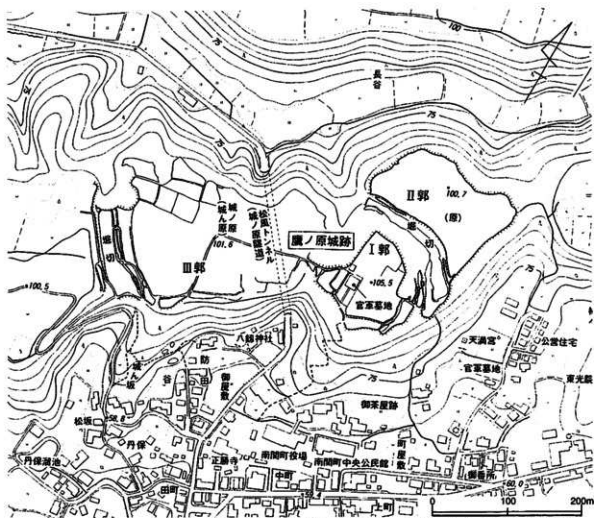
破城の仕方に大きな特徴があった。石垣は、単に崩して埋め込むだけでなく、一部の積み石は運搬されて、堀底に押し広げられていることが判明した。実際の所、破城自体はマイナス行為で、この様な作業の仕方に疑問を感じる。一方で、石垣の隅角部の外側下から「古寛永」が出土したことにより、島原の乱後に、二度目の破城が行なわれた可能性が出てきた。鷹ノ原城跡は、石垣の素晴らしさと破城の仕方に大きな特徴がある。東手に望む葛原城跡の本丸石垣との関連も同われる。

【参考文献】

- 『鷹ノ原城跡・ほつどん・奈木野城跡・今村豊後浦城跡』南関町文化財調査報告第3集 1996年
 『豊野城跡・小原城跡・坂下崎久城跡・坂下島ノ尾城跡・田口後浦城跡・鷹ノ原城跡』南関町文化財調査報告第4集 1996年
 『南関町史絵図・地図』南関町 1999年 『鷹ノ原城跡Ⅱ』南関町文化財調査報告第5集 2000年
 『鷹ノ原城跡』熊本史学会五十周年記念シンポジウム 中世—近世移行期肥後の城郭』発表資料 2000年



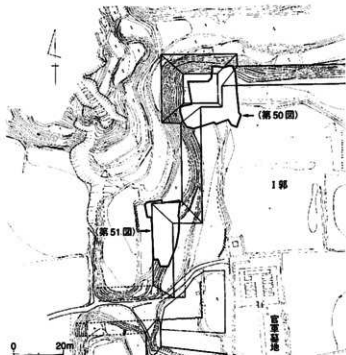
第46図 鷹ノ原城跡位置図



第47図 鹿ノ原城跡周辺地形図 ※「鹿ノ原城跡・ほっどん・奈木野城跡・今村豊後浦城跡」1996年

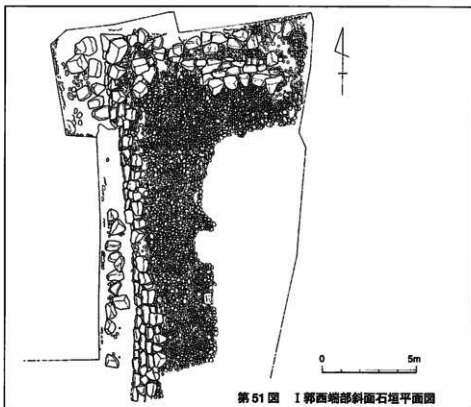
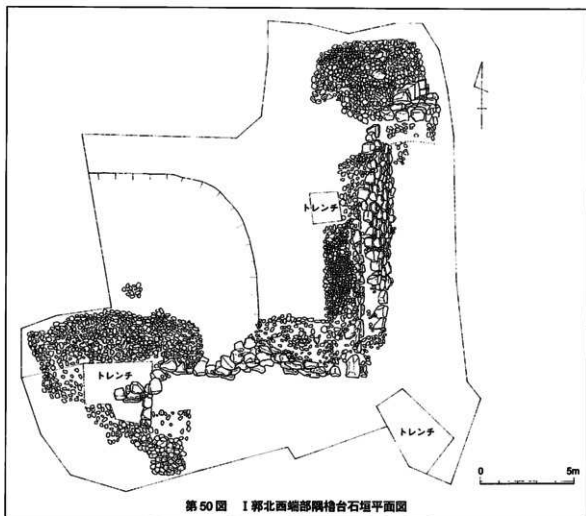


第48図 九州諸城図（南ノ関ノ城）
山口県立文書館所蔵



第49図 I郭西側石垣登線推定図

※原図：南関町教育委員会提供 トレース：満口貞由美



※原図：南郷町教育委員会提供 トレース：溝口真由美

③佐敷城跡 【所在地：^{あしきた}芦北郡芦北町佐敷 調査主体：芦北町教育委員会】

江戸後期の『^{あしきた}芦北人境誌』によれば、建武2年（1335）の城主は、名和氏一族の上神直光という。その後、田浦氏や水保氏の同族・佐敷氏が治めた。加藤時代の文禄元年（1592）には、梅北の乱が起こった。城代の加藤重次が、清正の朝鮮出兵に随行した際、島津方の梅北盛定から一時的に城を乗っ取られた事件である。戦国時代後半から近世初頭にかけは、肥後南部の防衛拠点として存在した番城である。一国一城令によって破城された。城の構造は「井上弥一郎梅北一揆始末覚」や「梅北宮内左衛門一揆之次第」の記述によって、一部が伺い知れる。以前から城跡では、部分的に近世的な石垣が露呈している箇所があった。しかし、これについては、正体不明なものとなされていた。つい最近までは「石垣が中世城に存在する」とは、想像も出来なかったからである。破城の実態が明らかになったのは、平成5年3月から実施された発掘調査による。当時、佐敷城再建計画があり、それに伴う事前調査であった。調査で埋め込まれた残存石垣が次々と検出されたのである。元を正せば、露呈石垣もその一部であった。さらに本丸の西北側登り口からは、石段も検出された。但し、後世の土地利用もあって、平場から遺構は検出されなかった。出土遺物の中で最も有名なものは「天下泰平国土安穩」銘の鬼瓦である。他に李朝系瓦等が注目される。石垣構築は、中世城をリメイクした時のものである。

櫓の建設を目玉とした整備計画も、発掘調査の結果に基づいた整備へと方針が変更された。平成10年には、歴史公園としての整備事業も目処がつき、現在は、城域確定を目的に出丸の調査が行なわれている。



※「天下泰平国土安穩」銘

第52図 櫓飾り瓦（鬼瓦）

※「佐敷花岡城Ⅱ」1996年

【参考文献】

『佐敷花岡城跡保存整備工事報告書』芦北町 1998年

『佐敷花岡城Ⅰ』芦北町教育委員会 1995年

『佐敷花岡城Ⅱ』芦北町教育委員会 1996年

『佐敷花岡城Ⅲ』芦北町教育委員会 1997年

『佐敷花岡城Ⅳ』芦北町教育委員会 1998年

『佐敷花岡城Ⅴ』芦北町教育委員会1999年

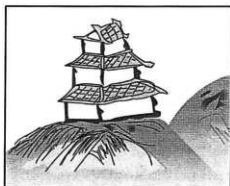
『佐敷花岡城Ⅵ』芦北町教育委員会2000年

『佐敷花岡城Ⅶ』芦北町教育委員会2001年



第53図 佐敷城跡位置図

- I. 文禄の役の頃
- II. 慶長2～3年の頃
二ノ丸と三ノ丸の間の石垣から
宇朝宗の瓦が出たので徳本城
出土の慶長4年から推測する。
- III. 慶長10年頃
慶長の岡絵図より



(佐敷城)

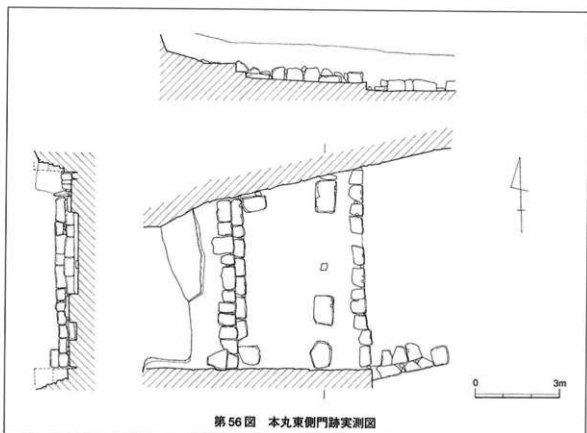
第55図 慶長国絵図にみる城郭

※『佐敷花岡城跡保存整備工事報告書』1998年



第54図 佐敷城石垣の時代区分

※『佐敷花岡城跡保存整備工事報告書』1998年



第56図 本丸東側門跡実測図

※『佐敷花岡城跡保存整備工事報告書』1998年

〔4〕近世城（近年、整備に伴う発掘調査が実施されている）

①熊本城跡 【所在地：熊本市古城・古京町・千葉城町 調査主体：熊本市教育委員会】

復元予定の本丸御殿跡を、平成11年度から本格的に発掘調査。大広間・小広間・西廊下の遺構を示す礎石列が検出された。西南戦争で発生した火災の痕跡も確認された。熊本城築城400年となる平成19年度には、本丸御殿や各櫓が復元され、石垣修理が終了する予定である。

【参考文献】『特別史跡・熊本城跡石垣保存修理工事の発掘調査報告書』 1999年



第57図 熊本城跡位置図

②人吉城跡 【所在地：人吉市麓町 調査主体：人吉教育委員会】

城跡地の西側地域にあたるグラウンドを発掘調査。石組みの地下遺構を有する侍屋敷跡を検出した。歴史資料館の建設を目指し、水の手門周辺の整備も計画されている。周辺地の原城（中世城）の国指定申請も予定されている。

【参考文献】『史跡人吉城跡Ⅰ文化センター本館跡地（相良清兵衛屋敷跡）』 1998年

『史跡人吉城跡Ⅱ相良清兵衛屋敷跡地下室遺構』 1999年



第58図 人吉城跡位置図

とみあき さいほく
③富岡城跡 【所在地：天草郡苓北町富岡 調査主体：苓北町教育委員会】

関ヶ原の戦い後、慶長6年（1601）から天草は、唐津藩主・寺沢広高の領地となり、広高は、支城の富岡城を築いた。しかし、後継者の堅高は、寛永14年（1637）の天草・島原の乱の責により領地没収となった。その際、城は一揆勢から攻められた。後任の山崎家治は、縮んだ富岡城を改修し、百間石垣を築き、袋池を造った。寛永18年（1641）から天草は、肥後藩預かりの天領となり、鈴木重成と重辰が代官となった。父子は城下に住い、藩から派遣された侍が城を守った。寛文4年（1664）から再び私領となり、戸田忠昌が城主となった。「戸田の破城」は寛文10年（1670）である。

調査前の城跡は、樹木の繁る城山公園で、切り石積みの石垣が本丸と二の丸に僅かに露呈していた。現在、富岡城跡では、県と町で整備事業に取り組んでいる、平成7年度からの発掘調査により「戸田の破城」の実態が解明された。石垣は、中途まで壊されて下部が完全に埋め込まれていた。東虎口は、痕跡さえ伺えない程に大量の土砂で埋め込まれていた。半場からは、礎石建物跡の並びが検出され、家治時代を描いた「富岡城絵図」の信憑性も確かめられた。二の丸の西側石垣は、3列に重なっていた。最奥は、広高時代の石垣で、天草・島原の乱でひどく汚れていた。二番目は、家治が築いた封印石垣である。ただし、急造のためか、程無くして全壊している。三番目は再築石垣で、確たる基礎工事の痕が確かめられた。この石垣を、戸田氏が破城したことになる。これに加えて、二の丸の北西側に露呈していた丸石の野面石積みは、調査の結果、広高時代の石垣の裏側に入り込むことも判明した。丸石石垣の裏側からは、地山の頁岩を砕いた割石の石垣も見つかった。これらは、中世・志岐・島原時代の石垣との見方がされている。

富岡城は「史実にある破城の実態を解明」「天草・島原の乱の痕跡を残す石垣を検出」「中世城のリメイク城であることを解明」したことで注目される。

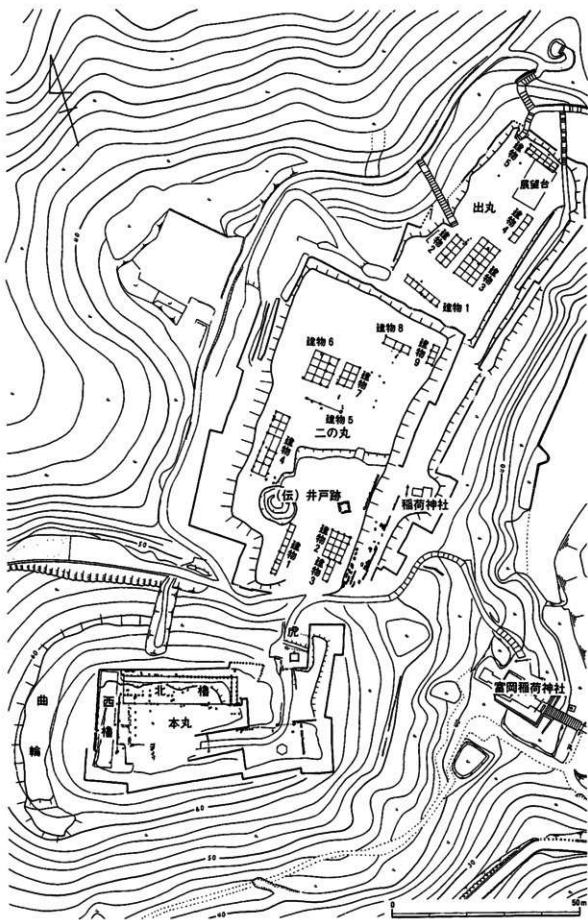
【参考文献】

「富岡城」（城の歴史と城跡）苓北町教育委員会 1986年
 「富岡城跡」苓北町文化財調査報告第4集 1996年
 「富岡城跡Ⅱ」苓北町文化財調査報告第5集 1997年

「富岡城跡Ⅲ」苓北町文化財調査報告第6集 1998年
 「富岡城跡Ⅳ」苓北町文化財調査報告第7集 1999年

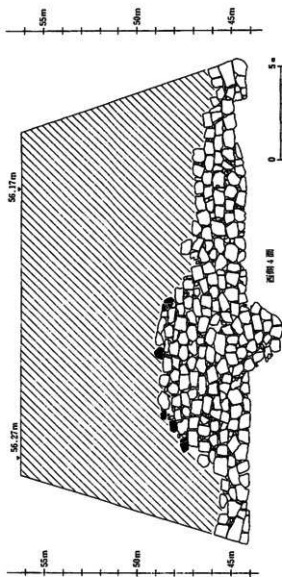


第59図 富岡城跡位置図



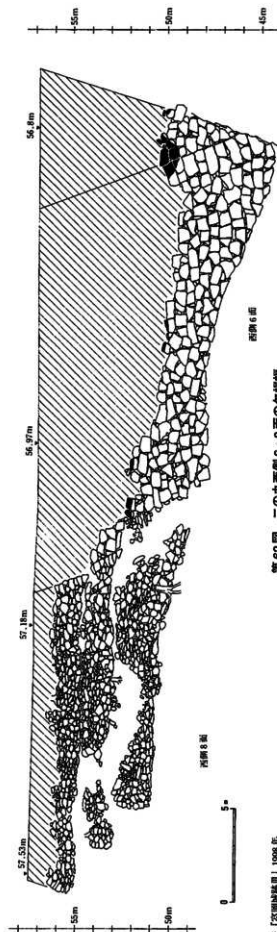
第60図 宮岡城跡全体測量図

※『宮岡城跡Ⅳ』1999年



※黒色に着色した部分は調査中に露呈していた石を表す

第61図 二の丸西側4面の欠損堀



第62図 二の丸西側6・8面の欠損堀

※「新潟県誌」1906年

2. その他の主要な中世城跡

昭和50年～52年度の悉皆調査の結果、主要な城跡であることが判明した。ただし、その後の調査は、余り進展していない。

①筒ヶ嶽城跡 つづ だけ 【所在地：荒尾市府本・小代山】 ふもと

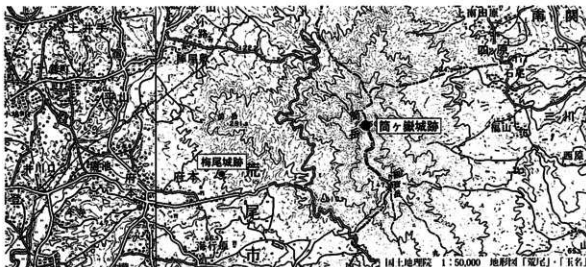
小代氏の居城。高差500mの高山に築かれた県下最大の山城。城域は、玉名市や玉名郡南関町を跨ぐ程の広さがある。山頂までは、30分近くの時間を要する。山頂を中心に「本丸」「二の丸」「三の丸」の呼称を残し、尾根筋に3本の堀切を刻む（三の丸の南側直下は、二重堀となっている）。本丸の西側斜面だけに残る野面積みの石垣は、府本集落を意識した装飾的なものである。本丸に案内板が設置された折りに、堀割穴から完形の糸切り土師器が出土した。府本の最上部に築かれた梅尾城跡は「里の城」で「山の城」の筒ヶ嶽城跡に対比する。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『大岡山・杉谷遺跡』1978年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

『荒尾市の文化財Ⅰ』1982年



第63図 筒ヶ嶽城跡位置図

②内牧城跡 うちのかき 【所在地：阿蘇郡阿蘇町内牧・中町】 なか

「一岡一城の令」によって破城された。阿蘇カルデラ内に位置する平城。城跡地は、開発が進んでいるが「本丸」「二の丸」「三の丸」の地名が残る。水渚の役目を果たした古川の一部が残存するので、城跡の範囲がつかめる。本丸跡の町立体育館の敷地や、埋没部分の古川沿岸には、切り石を積んだ石垣が埋没している。町道拡幅工事に伴い、平成6年度に、本丸跡周辺で発掘調査が実施された。町教委の建物から役場へ通じる脇道に石垣がある。内牧城時代のものと言われているが、確かでない。江戸時代に会所があったために、その時代の可能性もある。厳密には、中近世城の部類に属する。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

『内牧城跡』阿蘇町教育委員会文化財調査報告書第4集 1995年

③二辺塚城跡 にべづか 【所在地：阿蘇郡阿蘇町黒川・北塚・本塚】 くろかわ まつづか ほんづか

『阿蘇家旧記』は「平安期の初期、阿蘇則高の頃、二辺塚に城郭を築き浜の館又は浜城と称す」とある。阿蘇カルデラの水田地帯にあり「本塚」「北塚」と呼ばれる二つの独立丘陵が惣跡。山頂には、円形状の平地があり、直下に同心円状の小段が巡っている。山腹は、全くの自然地形で原野をなす。惣としての遺構が

山頂直下で終わっている所に大きな特徴がある。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往來社 1979年



第64図 内牧城跡・二辺塚城跡位置図

④南郷城跡 【所在地：阿蘇郡久木村久石・上駄原】

阿蘇氏（南郷大宮司）の拠点となった詰めの山城。阿蘇谷の南部地域に位置し、麓に館跡が残る。矢部町の「浜の館」に対比する城館跡。山城は山中にあり、残存度合いは良好。館跡の一部は、県教委により平成7年度と8年度に発掘調査が実施された。国場整備事業に伴うものであった。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往來社 1979年

『二本木前』熊本県教育委員会 1997年

『狐岡道跡』熊本県教育委員会 1999年



第65図 南郷城跡位置図



第66図 高森城跡位置図

⑤高森城跡 【所在地：阿蘇郡高森町高森・城山】

特殊な縄張りで「開」と呼ばれる二つの谷間が城跡地と推定される。「城山」に遺構は無いので、谷間しか考えられない。高森氏が島津氏と戦った「高森城合戦の覚書」が残る。麓に館を持ち、有事の際に谷間へ逃げ込んだのであろうか。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

⑥城林城跡 【所在地：菊池市木庭・古城】

城氏の居城。有名な(伝)菊池十八外城の中で、最大の平山城。高台の「城床」に平場を持ち、直下の鞍部に二重堀(内堀・外堀の呼称)が残る。麓の木庭集落に「陣内」「外園」「からめて」の地名が残る。大多数の家が城性である。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

⑦菊池城跡 【所在地：菊池市隈府・城山】

菊池氏の本城。菊池氏滅亡後は、赤埴・隈部氏の居城となった。隈府町の北端に位置する「城山」が城跡。明治初期から「菊池神社」の社地となっているが、それでも丘陵の北西側斜面部に、大規模な空堀と土塁の一部が残る。隈府町は、菊池城の城下町で、碁盤の目の様な地割りが特徴的である。区割りに「城下」「上井ノ内」「守山」「院馬場」「堀木屋敷」「町」「堀ノ内」などの地名が納まる。隈府町は、近世的な城下町と言ってよい。相良氏時代の八代古麓城・城下町と対比する。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第 67 図 城林城跡・菊池城跡位置図

⑧城村城跡 【所在地：山鹿市城】

城氏の居城。城氏が隈本城へ移った後は、隈部親安が入城した。「肥後の国衆一揆」の引き金となった城跡。大規模な平山城で、空堀が残る。一揆は、佐々成政の検地に親水が反発したことに端を発する。親水・親安の親子は、1万人を越える地域住民共に城村城に立て籠もり、肥後領主の佐々勢と戦いを交えた。これを契機に、阿蘇氏・相良氏などの52人の国衆が成政に立ち向かった。

周辺に「西付城」の高台が残っている。「東付城」は国場整備事業で、旧地形を留めない。三和町の田中城跡に対比する城跡。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往來社 1979年

⑨竹迫城跡 【所在地：菊池郡合志町上庄・城山】

竹迫氏の本城。大規模な平山城で「上庄地区には城跡を中心として、大環濠が取り囲む」との伝説がある。城跡の中心地には、複数の大空堀が残っていたが、近年、都市型公園として整備された。文化8年(1811)に描かれた『竹迫城絵図』がある。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往來社 1979年



第68図 城村城跡位置図



第69図 竹迫城跡位置図

⑩須屋城跡 【所在地：菊池郡西合志町須屋下屋敷】

丘陵地に築かれた平城。円形状の城で、北東側の一角に中心地がある。「下屋敷」と呼ばれ、土塁と空堀が残る。周囲に「陣ノ山」の地名。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往來社 1979年

⑪岩野道祖城跡 【所在地：鹿本郡植木町岩野・城山】

宗氏の居城で、小規模な平山城。山頂の小平場を核として、山腹に同心門の小段が重り巡る。麓の馬場集落と一体となった典型的な「総構えの城」である。熊本県の中世城跡の調査は、この城跡から始まった。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往來社 1979年



第70図 須屋城跡位置図



第71図 岩野道祖城跡位置図

ふるしろ くらもと ふるしろ
 ⑫古城跡（隈本城跡） 【所在地：熊本市古城町】

鹿子木氏・城氏が居城した。江戸時代は、加藤清正の熊本城の縄張りにも組み込まれた。「肥後の国衆一揆」では、領主・佐々成政の本陣となった。九州遠征の際、豊臣秀吉は行陣とも、古城に立ち寄っている。県立第一高校の敷地となっているが「本丸」「二の丸」「三の丸」の地名と地形が現存する。後世の土地利用の関係で、平場に遺構は期待できない。「古城堀」は、昭和26年の大水害後に排土処理場となって埋められた。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

かわしり
 ⑬河尻城跡 【所在地：熊本市川尻3丁目】

河尻氏の居城。「一国一城の令」によって破城された。加勢川の北側沿岸に築かれた平城。中心地は「外城」で、加勢川を天然の水濠として、三方に人工の水濠を巡らしていた。文化3年(1806)に作成された『河尻白鷺城跡全図』の写しが残っている。近隣の大悲寺には「慶長〇年、城用、藤原工作」の銘文が刻まれた半鐘があった(昭和48年に盗難)。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第72図 古城跡位置図



第73図 河尻城跡位置図

とよふく まつばせ
 ⑭豊福城跡 【所在地：下益城郡松橋町豊福・下城・上城】

薩摩街道の沿線という陸上交通の要所にある。城を巡って、相良・阿蘇・名和の三氏が壮烈な争奪戦を繰り返した。低平な円形状の丘陵地に築かれた平城。主郭と副郭からなり、間に「城堀」と呼ばれる内堀が存在している。かつては、城の外回りには「外堀」に該当する水田が巡っていた。しかし、近年は副郭と水田に家屋が建て込んで、城跡地周辺の様子が一変した。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

はなのやま とよの
 ⑮花山城跡 【所在地：下益城郡豊野町上郷・花山】

島津氏が阿蘇氏を攻める時に築いた「付け城」。堅志田城の西面に位置する。県内で唯一、築城期と廃城期の分かれる城跡。『古城考』によれば、築城は、天正9年(1581)12月、廃城は、天正12年(1584)3月。花山集落の南西方向1km先にある「高峯城」の山が城跡。谷向かいにも「新城」と呼ばれる山がある。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第74図 豊福城跡・花山城跡位置図

⑯陣内館跡 【所在地：下益城郡甲佐町豊内・陣ノ内】

『肥後国誌』によれば阿蘇大宮司の館跡という。3ha程の広い丘陵地に、大規模な空堀と土塁が残っている。県内最大級の館跡として注目される。今日、畑地であるが、農耕の際に鍬が礎石に当たると言われている。館跡麓の岩下地区に「塙ノ内」「東園」「西園」の地名が残る。陣町（中央町）の堅志田城跡とは、セツト関係にある。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

⑰愛蔵寺城跡 【所在地：下益城郡矢部町白藤】

岩尾城（館は、浜の館）と共に、阿蘇大宮司の居城である。相蔵寺集落の南方方向に城跡があり、広大な丘陵地に「本丸」「二の丸」「三の丸」「城門」の地名が残る。『慶安の差し出し』には、山輪2000間とある。同書に記された61城の中では、最大規模の縄張りを持つ。小西時代は、結城弥平次が城代を勤めた。結城氏は、城内にキリスト教の伝道所を造った。城内からは瓦が出土するが、クルス瓦が混じるとされている。ある意味で、中近世城の部類に属する。石垣の埋没が予想される。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第75図 陣内館跡位置図



第76図 愛蔵寺城跡位置図

やどろ とうつら やどろ
⑮矢崎城跡 【所在地：宇土郡三角町都瀬・矢崎】

宇土半島の南側海岸に築かれた大規模な海城。天正年間、宇土城の支城であったという。海に突き出した海拔20mの帯状の丘陵地に大規模な堀切が残っている。「戦時には、堀に焼け灰を投げ込んで、敵の侵入を防いだ」という口承が残る。明治期の開墾の際に、城跡から多量の焼米と陶磁器が出土したという。矢崎地区は、麓集落である。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

やつしろふるさと
⑯八代古麓城跡 【所在地：八代市古麓町】

七城で構成された大規模な複合山城。城歴は、先の名和氏と後の相良氏に大別される。名和氏時代の城跡は「飯盛城」「丸山城」「鞍掛城」「勝尾城」「八町畠城」とされる。麓集落は、春光寺の南区域という説があり、「御内」「陣内」「山鹿町」の地名が残る。

相良氏時代は「新城」と「鷹峰城」が新たに築かれた。麓集落は、春光寺の北区域とされ「山下」「大角」「古屋敷」「堤下」に拡大した。フロイスは『日本史』の中で、この時代の城下町の有様を詳しく記している。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第77図 矢崎跡位置図



第78図 八代古麓城跡位置図

のつみ
⑰野角城跡 【所在地：芦北郡芦北町宮崎・寺川内】

城主は、相良氏家臣の犬童丹羽守というが諸説もある。山城で、鞍部に総延長160mの二重堀を有する。「空堀」と呼ばれ、底幅は、内側で4.5m、外側で5.5mを測り、間に4m幅の土塁を挟む。堀切としては、県下最大級の造りである。島津氏に攻められて落城したとされ、その際、豊岡の地で子供と共に淵に身を投げた常陸御前（丹羽守の妻）の悲話も残る。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

あさくさ
⑱天草城跡 【所在地：本庄市本戸馬場・城の平】

天草氏の居城。本戸馬場町の西側に位置する山が城跡である。尾根筋には「一の丸」「二の丸」「出丸」等の地名が残るものの、目立った遺構は観察されない。「一の丸」は城山公園になって、青磁等の出土品が展示されている。南側の鞍部は、瘦せ馬の背中の様な形状をしており、城城が確定できない。城の造りは、八代古麓城跡に似ている。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年
 『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第79図 野角城跡位置図



第80図 天草城跡位置図

②岩城跡〔所在地：球磨郡錦町木上・岩城〕

地元では、平河義高の築城によると伝わるが、平安末期の『高野山文書』に城名の記載がある。球磨川の北側沿岸に城跡がある。小高い独立丘陵は、鋭角三角形をしており、中央部は、帯状形に窪んでいる。丘陵の北側区域は「本本城」、南側区域は「前城」と呼ばれる。中央部の窪地は、居住区域であったと推定される。出口の北西側を「備前堀」と言う。城跡地の周囲に「馬場」「大堀」「大園」等の地名が残っている。文献的には、県内最古の城である。表採遺物の年代は、文献資料と一致する。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年

③鍋城跡〔所在地：球磨郡多良木町黒肥地・鍋城〕

上相良氏の本拠地。県内最大級の平山城。「鍋城」と呼ばれる独立丘陵が城跡で「本丸」「二の丸」の地名が残る。「本丸」北側に堀切が走り、「二の丸」東縁と南縁に、高さ1m程の野面積み石垣が残存する。「二の丸」南側区域には、直径4mの古井戸跡がある。堀切より北側に75m進んだ所に、城跡地の最高所がある。この区画では「多良木町史」編纂事業に伴い、昭和47年度に、町教委で発掘調査が実施された。城跡の北端は「古城堀」と呼ばれる迫地で、屋面に「岩風呂」と呼ばれる横井戸が残る。

【参考文献】『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1977年

『日本城郭大系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社 1979年



第81図 岩城跡位置図



第82図 鍋城跡位置図

3. 94市町村の城跡分布状況

	市町村名	城 数				合計
		古代	中世	中近世	近世	
11市	荒尾市	14				14
	玉名市	12				12
	山鹿市	18				18
	菊池市	16				16
	熊本市	29		1		30
	宇土市	7		1		8
	八代市	21	1	1		23
	人吉市	19		1		20
	水俣市	4				4
	本渡市	12				12
	牛深市	2				2
玉名郡	(小計)	154	1	4		159
	信明町	7				7
	横島町	1				1
	天水町	2				2
	玉東町	3				3
	菊水町	16				16
	三加和町	11				11
	南園町	17	1			18
	長洲町	2				2
	(小計)	59	1			60
鹿本郡	鹿北町	11				11
	菊鹿町	1	14			15
	鹿本町	2				2
	鹿央町	6				6
	植木町	11				11
	(小計)	1	44			45
菊池郡	七城町	6				6
	旭志村	1				1
	大津町	11				11
	菊陽町	2				2
	合志町	3				3
	泗水町	4				4
	西合志町	3				3
	(小計)	30				30
阿蘇郡	一の宮町	4				4
	阿蘇町	8				8
	南小国町	7				7
	小国町	9				9
	座山村	1				1
	波野村	0				0
	蘇陽町	3				3
	高森町	8				8
	白水村	3				3
	久木野村	4				4
	長陽村	3				3
上益城郡	西原村	3				3
	(小計)	53				53
	御船町	11				11
	嘉島町	1				1
	益城町	6				6
	甲佐町	5				5
	矢部町	16				16
	清和村	5				5
	(小計)	44				44

	市町村名	城 数				合計
		古代	中世	中近世	近世	
下益城郡	城南町	2				2
	富合町	2				2
	松橋町	6				6
	小川町	5				5
	豊野町	4				4
	中央町	4				4
	砥用町	7				7
	(小計)	30				30
宇土郡	三角町	1				1
	不知火町	1				1
	(小計)	2				2
八代郡	坂本村	8				8
	千丁町	1				1
	鏡町	0				0
	竜北町	7				7
	宮原町	2				2
	東陽村	6				6
	泉村	0				0
	(小計)	24				24
芦北郡	田浦町	3				3
	芦北町	11	1			12
	津奈木町	1				1
	(小計)	15	1			16
球磨郡	錦町	3				3
	上村	2				2
	免田町	1				1
	岡原村	3				3
	多良木町	6				6
	湯前町	2				2
	水上村	2				2
	須恵村	3				3
	深田村	2				2
	相良村	6				6
	五木村	0				0
天草郡	山江村	3				3
	球磨村	2				2
	(小計)	35				35
	大矢野町	4				4
	松島町	3				3
	有明町	7				7
	栖本町	4				4
	姫戸町	1				1
	龍ヶ岳町	1				1
	御所浦町	1				1
	倉岳町	3				3
平均	新和町	2				2
	五和町	8				8
	苓北町	1		1		2
	天草町	3				3
	河浦町	5				5
	(小計)	43		1		44

	古代	中世	中近世	近世	合計
11市	154	1	4		159
62町	1	318	2	1	322
21村		61			61
(合計)	1	533	3	5	542
平均	—	5.7	—	—	—

『熊本史学会五十周年記念シンポジウム』発表資料
大田幸博 2000年

4. ま と め

最近の調査で、注目される城跡は、下記の通りである。

種 別	城 名	ポ イ ン ト
古代山城	鞠智城跡	・県教委では、23次の発掘調査を実施。 ・近年、国内の古代山城として初の発見が相次ぐ。八角形建物跡、貯水池跡、貯木場跡が検出されて、文字の書かれた木簡が出土した。
中世城	田中城跡	・町教委では、16次の発掘調査を実施。大規模な平山城で、多数の掘立柱建物跡や、岩盤を掘り込むV字形の土空堀が検出された。 ・城は、肥後の国衆一揆の最終拠点となり、豊臣勢に攻められて落城した。 ・日本最古の陣取り図が残る。
	隈部館跡	・町教委では、昭和49年度に発掘調査を実施。主殿や会所の礎石建物跡等が検出された。泉水跡や立石を伴う庭園跡が、建物跡とセットになって現存する。石垣で構成される弊型の登城道は、近世城そのものである。 ・主郭の直下に大規模な堀切。
	堅志田城跡	・町教委では、13次の発掘調査を実施。大規模山城で、二の丸から岩盤を掘り穿めた大型の掘立柱建物跡を検出。Ⅰ～Ⅱ郭間の岩盤を切断した堀切から、薬穴門跡を発見。 ・阿蘇氏と島津氏との合戦の様子は島津氏家老の日記に詳しい。
中近世城	麦島城跡	・市道建設に伴う発掘調査で、城跡の遺構を確認。三角デルタの低地に築かれた平城。大型の礎石建物跡や、石組みの地下構型遺構を検出。 ・30年強の短い城歴であるが、3度の修復工事が行われ、石垣も重複している。 ・城は、地震で壊れたと伝えられる。
	佐敷城跡	・県内では最初に、破城の実態が明らかになった。 ・町教委では整備計画に伴い、平成5年度から発掘調査を実施（町単費事業・国庫補助事業）。文字の書かれた瓦や室町時代の瓦が出土。 ・「梅北の乱」では、島津方の武士から、一時的に城を乗取られた。
	鷹ノ原城跡	・「天草・島原の乱」後に、二度目の破城が行われたことが判明。崩した石垣の積み石は、かたづけられていた。本丸から検出された石垣は、熊本城の天守台石垣に類似する。 ・町教委では、平成7年度から発掘調査を実施（町単費事業・国庫補助事業）。
近世城	富岡城跡	・町教委は、城跡整備事業に伴う発掘調査を平成7年度から実施（町単費事業）。 ・二の丸の西側石垣は、三列に重なっていることが判明。築城者の寺沢広高が築いた石垣裏からは、中世の野面積み石垣を検出。 ・「戸田の破城」の実態も解明された。

報告書抄録

書名	熊本県の主要城跡
シリーズ名	菊鹿町文化財調査報告 第8集
編著者名	大田幸博
編集機関	菊鹿町教育委員会
所在地	熊本県鹿本郡菊鹿町下内田 713
発行年月日	2001年3月31日

所収城跡名	所在地	所収城跡名	所在地
鞠智城跡	鹿本郡菊鹿町米原	筒ヶ嶽城跡	荒尾市府本・小代山
田中城跡	玉名郡三加和町和仁	内牧城跡	阿蘇郡阿蘇町内牧・中町
隈部館跡	鹿本郡菊鹿町上永野	二辺塚城跡	阿蘇郡阿蘇町黒川・北塚・本塚
米の山城跡	鹿本郡菊鹿町上永野	南郷城跡	阿蘇郡久木野村久石・上駄原
堅志田城跡	下益城郡中央町中郡	高森城跡	阿蘇郡高森町高森・城山
永里城跡	球磨郡上村上	城林城跡	菊池市本庭・古城
河内浦城跡	天草郡河浦町河浦	菊池城跡	菊池市隈府・城山
萩原城跡	玉名郡菊木町萩原・城内	城村城跡	山鹿市城・城
轟嶽城跡	玉名郡南関町関東	竹迫城跡	菊池郡合志町上庄・城山
三川城跡	天草郡五和町上野原	須屋城跡	菊池郡西合志町須屋・城跡
宇土城跡	宇土市神馬町	岩野道祖城跡	鹿本郡植木町岩野・城山
伊倉城跡	玉名市片瀬訪・中城	古城跡	熊本市古城町
麦島城跡	八代市古城町	河尻城跡	熊本市川尻三丁目
鷹ノ原城跡	玉名郡南関町関町	豊福城跡	下益城郡町松橋町豊福・下城・上城
佐敷城跡	芦北郡芦北町佐敷	花山城跡	下益城郡豊野町上郷・花山
熊本城跡	熊本市古城・古京町・千葉城町	陣内館跡	下益城郡甲佐町豊内・陣ノ内
人吉城跡	人吉市麓町	愛蔵寺城跡	下益城郡矢部町白藤・下町口
富岡城跡	天草郡苓北町富岡	矢崎城跡	宇土郡三角町郡浦・矢崎
		八代古麓城跡	八代市古麓町・上り山
		野角城跡	芦北郡芦北町宮崎・寺川内
		天草城跡	本渡市本戸馬場・城の平
		岩城跡	球磨郡錦町木上・岩城
		鍋城跡	球磨郡多良木町黒肥地・鍋城

菊鹿町文化財調査報告 第8集

熊本県の主要城跡

平成13年3月31日

〔発行〕

菊鹿町教育委員会

〒861-0406 熊本県鹿本郡菊鹿町下内田713

☎0968-48-3115

〔印刷〕

株式会社 トライ

〒861-0105 熊本県鹿本郡植木町味取373-1

☎096-273-2580

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『菊鹿町文化財調査報告第8集 熊本県の主要城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。

書名: 菊鹿町文化財調査報告第8集 熊本県の主要城跡

発行: 山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL: <https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日: 2025 年 7 月 7 日